
ネットオク男の楽しい異世界貿易紀行

medici

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

【Nコード】

N3102Y

【作者名】

medici

【あらすじ】

最終学歴高卒で親元パラサイトの青年綾馳次郎はネットオークションで生活する物欲溢れるネオニート（収入があるニート）。出品するお宝探して蔵から見つけた古い鏡は異世界と行き来できる魔法の鏡だった！！ 異世界のお宝を買うために相互貿易でお金を貯めて、物欲満たして幸せ一杯の異世界ライフ！ になる予定。物欲だけじゃなく、チートとか奴隷とかもあります。男の欲望とか多めなので苦手な方はスルーしてネ。

第1話 うぶだしミラーは異世界の香り（前書き）

初作品、初投稿です。お見苦しい点ばかりですが、よろしくお願いします。

第1話 うぶだしミラーは異世界の香り

「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国であった」

有名な小説の冒頭の文が頭のなかで反芻している。

俺、綾馳次郎アヤセシロウの場合はもっと劇的に

「蔵の古い鏡を抜けると、そこは真つ暗な部屋であった」
となるだろうか。

……………よし。意味わからねえ……………。

その真つ暗な部屋にも鏡があつて、もともといた蔵に繋がっているようだ。鏡面が妖しく蔵の中を映している。

鏡の中に飛び込んでみれば、問題なく行き来できることに安堵の息が洩れた。

蔵に来るときに持ってきていた懐中電灯で部屋を照らす。石作りのカビ臭い部屋の内部が浮かび上がるが、鏡以外にあるのは木製の箱だけだ。それ以外にはなんにもない。

だいたい8畳間くらいの部屋だろうか。窓もなんにもないので、外の様子は全くわからない。何の音も聞こえてこないから、地下室かなにかかもしれない。あとは出入り口の木製の頑丈そうな扉がひとつ。ここから外に出られるんだろう。

とりあえず、木製の箱を開けてみることにした。木製の箱というか、昔熱中したRPGの宝箱みたいな箱だ。

……おおっと！ どくばり！ は勘弁してくれよ——、と、思いながら開けると、当然ワナなどではなく問題なく開いた。

中身は服一式だった。

中世風というかなんというか、シェイクスピア劇で使う扮装のよ
うな服だ。絹製でフリフリの付いた長袖シャツ、金系の刺繍が施さ
れたいかにもな時代めいたベスト、太めのズボンとベルト、他には
なにも入っていないかった。

服はとりあえず箱に戻し、これからどうするか考える。扉から外
に出てもいいが……。

——少し悩んだが、とりあえず鏡の世界から脱出して、蔵に戻る
ことにした。

蔵に戻り、さきほどの部屋と同じようにカビ臭を感じながら、気
持ちを落ち着かせて考えてみる。ありえないことが起きているとい
うのはわかる。古い蔵で見つけた鏡が別世界へ通じてました！ な
んで、ファンタジーではお約束な設定だけれども、実際に起こると
存外に困るもんだな。さて、どうする。

……まあ、とりあえず言えることは、この鏡はすごい高値で売れ
る！ ということやで……。

俺は高校を卒業してからの就職で失敗して、それから2年近くニートが続いている。就職で失敗したと言っても、就職ができなかったわけではなく、最悪最低のブラック企業に入ってしまった、精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまい退職した、というだけの話だ。

退職してからは、どうしても仕事をする気になれずブラブラゴロゴロしてたんだが、いつまでもなにもせずにいられるわけもないわけで、偶然本屋で見かけた「儲かる副業！ネットオークションで月収30万円！」という本を買い、その本の通りに、古本やら古道具やらをネットオークションで売りさばいてみたら、ことのほか儲かってしまつて……、それからは、まあ、それで生活している。

幸い、近所で毎週フリーマーケットが開催されているし、地元の大きい神社での骨董市なんかもそれなりに良い物が買えるため、オークションで思った以上の収益を上げることができていた。

途中からは自分も面白くなつてしまつて、半分くらい趣味と実益を兼ねていると言つても過言ではないけどな。

最初のころはなにが高いのかよくわからなくて、赤字とまではいかなかったが、「儲かる」というほどではなかった。今では**アイテム**ぶん慣れてきて、微妙に貯金すらできているほどだ。もともと物好きではあったが、これはなかなか才能があるなど、自分でうぬばれちゃうね。

鏡を見つけたのは、以前からアプローチをかけていた近所の旧家の蔵の中だった。桐の箆笥の裏に隠されてるようにして置かれていて、枠はマホガニーかウォールナットで、重厚な意匠の施され、年

式も古そうだったし「これは存外良さそうなものを見つけたぞ、問題はなんて言いくるめて買い叩くかなー」などと皮算用していたのだが……。

考え事をしながら暗い蔵の中をウロウロしていたからか、足元に雑に積まれていた古道具類に足を取られて、鏡のほうに倒れこんでしまい、そのまま鏡の中に吸い込まれた。そして、冒頭にもどる。

……というわけだ。ザツというと、まあ……そんなかんじ。

蔵の中にはまだ金になりそうなものがあつたが（古い皿や火鉢などの道具類とか、その道具をしまう行李も売れるし、昔のオモチャなんかも売れる。だいたい古いつてだけである程度高く売れちゃうので、蔵はまさに宝の山なのよ）、今はまずは鏡だ。蔵から出て、家主さんに、蔵の中にあつた鏡だけ買い取りたいと交渉を始めることにした。

「あ、すんませーん。蔵のなか見させてもらった者ですけどぉー」

居間で茶を飲んでいる家主（80歳くらいのおばあちゃん。経験から言つて老婆はチヨロイ）に声をかける。

「蔵の中にあつたもので、とりあいず大きい姿見だけ今回譲つて欲しいんですよ。ちょっとサイズ大きいもんで、他のもの運べないもんでね、鏡だけ。で、金額なんですけど、4000円で買い取らしていただきたいんですよ。よろしいですか？」

一気に喋る。もう4000円は出しておく。取引は有無を言わさずスピーディに行うのが肝心だ。「心変わりしだす前に撤収しなければ……」と思っていると。

「あー、あんなかにあるもんはもう全部いらんもんじゃけ、なんでも持つてつてええよ。金もいらん」

と老婆。やったー！ 超ラッキー！ だが、実はこれはよくあるパターン。蔵を開かせるところまでいけば、もうほとんど中身はもらえたも同然だったりするのだ。

蔵の持ち主つてのは大抵は蔵のことを「古いガラクタが詰まってる片付けの面倒な倉庫」程度にしか認識していない。自前の倉庫を知らないやつに漁らせるのは嫌だけど、かといって中身を大事にしているわけでもない、というわけだ。俺みたいな貧乏人からすると宝の山なんだけどねー。金持ちつてのはそういう性分だから金持ちなのかもしれないな。

——そんなわけで、無事鏡をゲットして、割らないよう車に積み込んで家まで運んだ。

俺は、一人暮らしをしていない。

両親と同居してる。もつと言うとパラサイトと言ってもいいかもしれない。就職してないから……、と言い訳してちよつとばかりの食費を払っているだけである。兄弟は兄貴と姉貴がいて、どっちももう家を出てる。

俺は末っ子で甘やかされて育ったから、パラサイトでも仕方がないんだ！でも就職したら家から出ます！ 就職したら必ず出ますぞ！

第2話

異世界屋敷はヨーロッパの香り（前書き）

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り

行くべきか行かぬべきか、それが問題だ。

鏡を前にして俺は唸っていた。この鏡が別のどこかへ通じているとしても、別に無理して行かなくてもいいのだ。必ず帰ってこられる保証もないし、うっかりどっちかの鏡が割れたらおそらくはそれでジ・エンド。どちらのも行き来できなくなるうだろうしな。

向こうに行けないのはともかく、帰ってこれなくなるとかマジ勘弁。

……かといって、なにもせずにこの鏡を売ると言ってもな……。最低でもどこへ繋がっているのか程度は調べないと、売りようがない。「超レア！どこかへ繋がっている魔法の鏡！特価1億円」では誰も買わないだろう。というか本気にされない。どうみてもネタ出品だね。

なのでとにかく、鏡の世界を探索することにした。

鏡が繋がっているのは謎の石の部屋。その木製の扉を開いた先がどうなっているか全くの未知数なので、考えられる範囲で準備しなければならぬが、とりあえずはすぐ戻れる範囲だけ調べてみようと思う。

玄関から編み上げブーツを持ってきて履き、懐中電灯で照らしな

がら鏡の世界へ入る。ヌルツとした触感もなく、世界を移動する。本当に奇妙だが、今はとにかく探検だ。この鏡自体のことはおそろくどれほど調べてもわかるまい。

木の扉に門が掛かっていたので外し、少しだけ扉を開いて向こう側を伺う。

石の部屋は地下室だったのだろうか、扉の向こうは同じような石作りの昇り階段で、階段が途切れた先から淡く光が洩れている。正直すでに心臓バクバクなんだが、とにかく進むしかない。正直、かなりビビッてます。

おっかなびつくり階段を上った先は、西洋風の屋敷の廃屋の一室だった。窓から指す日の光が、淡く部屋内を照らしている。

広さとしては3LDKといったところだろうか。現代的な西洋屋敷という風情よりは、もう少し雑な石作りの屋敷で、そのまま残されたオーク材の重厚なテーブルや、マホガニー製の食器棚が、かつての住人の生活を偲んでいる。

イギリスかフランスあたりへと繋がっていたのだろうか？、と考えながらも、残されている道具を物色する。食器棚やテーブルなどの家具は残されているが、小物類はこれといってなにも見つからなかった。前住人は大物だけ残して引越したのだろうか、上手くすればオクで売れるものが見つかると思ったんだが……。

まあ、食器棚やテーブルもかなり良い物なので、売れば相当良い金になるだろう。勝手に持って帰って売っていいのかどうかは知らないが。

どうやら外国と繋がっていることが判明したので、外に出てみる

ことにする。恥ずかしながら、少しだけファンタジー的な異世界と繋がっているんじゃないかという懸念があったのだ。

鏡の世界ってだけで十分にファンタジーだしな。

家の外も完全に荒れ果て、雑草というレベルでは片付けられないレベルの有様である。つか、木だよこれ。林の中に家があるって感じに近い。日本家屋だったらとつくに倒壊してるだろう。

そうでなくても家はもともと林の中にポツカリと開いた場所にあったみたいで、回りは全部、背の高い広葉樹の林。それでもなんとか、もともと道だったらしきところを発見し、しばらく歩いて行くと草原に出た。人影は全くない。田舎っていうか、手付かずの土地って感じ。

されどもめげずにしばらく歩いてみると、小さい村を発見した。

鏡のある屋敷と比べると質素な石作りの家が十数件ある。俺は林の中から身を隠して、とりあえず発見した第一村人の農夫を観察してみることにした。

農夫は西洋系のおっさんといったところ。やはり外国……、つまり地球のどこかではあるらしいが、ここで俺が出て行っても身分証明もなけりゃ、言葉も通じないわけで実際どうしようもない。なので、さて、どうするか……。

そのまま隠れて観察を続けていると、畑の反対側から農夫の嫁といった風情の女が来て叫んだ。

「あんだー、お昼持って来ただよー！」

それに気付いて作業を中断し、返事をしながら女のほうへ向かう男。

……うむ。完全に日本語だったな。

厳密には、日本語として「理解した」という感じだ。耳に入ってきたときはまったく別の聞きおぼえのない言語だったはずだ。だがなんていうか、脳内で一瞬で日本語として変換された。

これなんて翻訳こんにゃく？

とりあえず、いったん屋敷へ帰ることにした。

今回の自動翻訳でまた一気にファンタジー度が増した。うっかり「やあ、日本から観光に来た者です、H A H A H A！」なんて声を掛けたりいきなりオマワリさんと呼ばれて拘束！ となる可能性も排除できないからな。現代の地球の西洋の国なら、そんなことはないだろうけども、最悪の可能性も考えておかないといかん。

いったん屋敷に帰った俺は、なにかこの世界に関する情報がないか今一度家捜ししてみることにした。まだ見てない部屋もあるとはいえ、リビング？ にテーブルと花台くらいしかないところを見るとあまり期待はできそうもないが……。

とりあはず書籍を探したが、やはり一冊も見つけられなかった。文字を見れば一目瞭然だったただがな。

他の部屋にも家具がいくつか残されていた、タンスやベッド、チェアにデスク、チェストにブックビュロー。どれも良い品だ。まとめて売れば100万円は下らないだろう。もう、これらを売っちゃって、それでこの鏡のことはおしまいにしてもいいのかも……、と思ってしまう程度には美味い^{うまい}です。

しかし肝心の決定打になる情報が見つからない。

この家にあるのは、地下室の箱の中にあつた例のシェイクスピア服と、英国アンティークみたいな趣の家具類だけである。まあ、これらだけとつても現代世界とは思えないわけだが、アンティーク趣味の人が住んでた家と言われてしまえばそこまでであるからして。

あとは裏口と屋根裏ぐらいいしか見るところが残っていない。正直、屋根裏はただでさえホコリっぽいのに勘弁してほしいので、裏口を開けてなにかないか探してみる。

と、そこに蜘蛛がいた。

厳密には裏口の壁のところに蜘蛛が巣を張ってたのだが、この蜘蛛、胴体だけで10センチほどもある。そして脚が12本あり、脚も入れた全長は25cmくらいだろうか。巣の真ん中で大人しく佇んでいるだけだが、……これはでかい。

蜘蛛が苦手な人が見たら気絶してもおかしくないレベルだわ。

とりあはず携帯でおっかなびつくり写真に収めて、鏡の部屋から自分の部屋へ戻る。

携帯の蜘蛛の画像を元に巨大な蜘蛛についてググる。ちょうど同じサイズのものでルブロンオオツクモというのが出るが、これではない。そもそもツチグモじゃないしな。ジョロウグモの類のようだし。そもそも脚が12本ある時点で蜘蛛ですらないし。

落ち着くために台所でコーヒーを入れて持ってきて、一息入れた。インターネットでの情報が絶対だと言うつもりはないが、これでひとつの可能性が消えたと見て間違いないだろう。

とりあえず「現代の地球のどこか」ではない。過去の地球か、異世界かの二択になったわけだ。

今、ググっても見つけれないクモは、単純に絶滅しただけかもしれないからな。とはいえ、自動翻訳の件もあるし、異世界の可能性のほうが高いと言わざるを得ないだろうな。これからは、異世界にいるものとして行動したほうが良さそうだ。

つまり、モンスターが出るかもしれない。とか、魔法で撃たれるかもしれない。とか、異端審問に掛けられて火あぶりなるかもしれない。とかだ。

気楽な気持ちでうろついていたらヤバイと思っとかないと……。

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り（後書き）

オーク材とかマホガニー材とかは、主人公がそう思っているだけで、
厳密にはきつと違う木です。よく似てるだけで。

第3話 異世界衣装はコスプレの香り

親ゆずりの臆病者で子供のころから損ばかりしている。

そんなわけで、もう少しだけ向こうの世界の情報を得たら鏡は売却することにした。単純に異世界とか怖いし、過去の世界だとしたら、それはそれで怖い。ハッキリ言っただけ俺の手に余る。

厳密には売却する前に「異世界へ渡航できる権利」を100万円くらいでネットで若者を募って売ろうかと考えている。行けなかったらお金は頂かないという風にすればいいしな。

300人も向こうに送れば3億円ですよ。ウツハウハ。

その後で、ノウハウを売るといふ触れ込みで鏡ごと売却してしまえば、異世界とも後腐れなくさよならできるし、お金もたくさんゲットできて一石二鳥だわ。7億円とかで売れば、合計で10億円！遊んで暮らせる！！

……とはいえ、現段階では完全に絵に描いたモチ。もっと情報を得て、それなりに上手くやらなきゃな！。

で、まあ、結局はもう少し鏡の世界の情報が必要なのだ。なのでいったん鏡の世界へ入り、例のシェイクスピア服を持つてくることにした。あ、向こうのものってこっちに持ち込めるのかな、そういえば。

……普通にこっちの世界に持ち込みました。

ひよっとすると持ち込めない可能性も考えてたけど、まあこれで、
屋敷の家具はこっちでオクに掛けられる。ちよっとした軍資金に
はなりそうだ。

屋敷の服は何年も宝箱の肥やしだったとは思えないほど、しっか
りしており、サイズも多少小さい程度で問題なく着れた。

しかし……、これは恥ずかしい。ヒラヒラとした飾りの付いたシ
ルクのシャツってだけで、なんとも言えない気分だが、さらに刺繍
入りのベスト。これもちよっと光沢のある生地だし、パンツもかす
かに光沢がある。なんで全体的に光沢多めなんだろう。

だいぶコスプレっぽくて恥ずかしいが、あの世界に溶け込むには
必要な処置だと自分を納得させる（農夫もこんな格好だったような
気がするしな）。まあ、自前の服だと、ジャージとかトレーナーと
か、そんなもんしかないし、それよりは自然だろうと思うことにし
た。

バッグに必要な道具、というか、もしもの時の自衛の為の武器（
自作のナイフを数本）を入れ、編み上げブーツを履いて鏡の中へ入
る。

屋敷の外にでて、ふと気付く。そういえば時間のことなんにも考
えてなかった。

日本時間は10時をちよっと回ったところだが、こっちも同じ時
間とは限らないのだった。全く知らないところで日が暮れるたりし
たら、それこそ死の危険がある。

日の高さを確かめようとして、眼に入っただものに愕然とする。

そんなことをツラツラ考えながら歩いていると。

ガサッ ガサッ

50mくらい向こうの茂みから音がして、すわモンスターかと身構えたところ。

不精ヒゲのワイルド系獵師が出てきた。

殺したばかりと思いきイノシシ的な生き物を引きずって。

第3話 異世界衣装はコスプレの香り（後書き）

超短くてすみません。

第4話 異世界はRPGの香り

「どっどど どっどど どっどど どっどど」

まずい、まったく心の準備ができていなかった。「どつもこんにちは」 と言おうとしたのに死ぬほど 吃どもったった。

「どうした？ こんなところでなにしてる？」

「どどどどつもこんにちは」

やっと普通にこんにちはできた。

獵師は見た目30歳後半といった感じの、ブラウンの髪と無精ヒゲがワイルドなナイスミドル。弓を肩に掛け、腰には大振りなマチエツト。マタギよろしく毛皮の服を着て、こちらを見つめる両目はめづから目力強すぎてちよつと怖い。

質問に挨拶で返してしまつたが、仕方がない、なんとかファーストコンタクトを成功させねば……！ と、とにかく言葉を紡いだ。

「えー、あつと、それがですね、なんというか、自分もどうして自分がここにいいのかからなくてですね。なんというか……、気付いたらあつちの森の中にいたつていうか……、自分の過去が思い出せないつていうか……、ハッキリ言つと記憶喪失つていうか！」

記憶喪失設定でいくことにしてみた。

まあ、これは最初から決めてたことだが、他に思いつかなかったからな。しかし、獵師のポカンとした表情を見ると、どうも失敗したかな？ という気もしてくるけど仕方がない。押し通すしかないぜ。

「記憶喪失か……。見たとかなり若いみたいだが……。おい、名前くらいは覚えているのか？」

「……名前と歳は覚えています。ジロー・アヤセ。21歳です」

そう答えると、アゴに手をやってなにやら思案していたようだが、彼の中でなにかを把握したらしく、ウムと頷いて言った。

「そうか。なぜ記憶を失ったのかはわからんが、……おそらく内陸からの脱出組だろう。ベストの刺繍もドレスシャツもこの辺りには無い物だ。……憲兵から逃げてきたにしては、身綺麗過ぎるが……」

「……えっと、憲兵に追われる要素があるんですか？」

聞き捨てならない単語を聞いて焦る。え？ ガチで憲兵とか存在してたんですか……？ のん気に村で「こにやにやちわ」してたらガチでタイーホの可能性もあつたってこと？

「ああ、内陸からの脱出者は憲兵に捕らえられ本国送還になるか、依頼して労働奴隷になるかのどちらかになる。まあ、だいたいの脱出者はこつちに協力者を持っていて上手く溶け込んでいるようだがな。……お前みたいに脱出者丸出しの格好してるやつは稀だよ。ちなみに、脱出者を憲兵に引き渡すと報奨金として銀貨3枚が貰える」

そう言つてニヤリと笑う獵師。ちなみにじゃないよなみにじゃ。

良かれと思つて着た異世界服で、マジで奴隷になる5秒前とか洒落になんねー！！こんなことなら大人しく自前の服着てればよかったんや……。このガチムチ獵師が俺を憲兵に引き渡したら、異世界で楽しい奴隷生活がはじまつてしまふんや……。

俺はよほど絶望的な顔をしていたらしい。獵師はそんな俺をみて嬉しそうにワツハツハと豪快に笑い、手を振りながら言つた。

「悪い悪い。冗談だ。いや、銀貨3枚の話は本当だが、別にお前を憲兵に渡したりはせんよ。ここでの出会いもル・バラカのお導きだろっ」

「……ありがとうございます。……いやあ、心臓に悪いですよ……」

「さて、俺はコイツをさつさと解体せにやらんから家へ帰る。どうする？ 来るなら運ぶのを手伝え」

と言つて、イノシシを引きずつて村とは反対方向へ歩き出す獵師。どうするもこうするも、今のところは獵師を頼る他になさそうなので、イノシシを運ぶのを手伝うしかなかった。

獵師の家は、村からは大体1kmほど離れてた小高い丘の上にあった。村にあった石の家とだいたい同じような家で、周りには小さい畑があり質素ながらも、なんていうか、幸せの気配がする、そんな家だ。

俺はイノシシと一緒に運びながら、「このガチムチ獵師がアツチの趣味の方だったら、どう考えてもオツスオツス」などと考えていたが、素朴な生活の気配のする家が見え、そこに獵師の奥さんと思いき女性がいるのを見て、ひとまず安心した。ノンケだコレ。

奥さんと思いき女性はやはり奥さんだった。獵師よりだいぶ年下と思われる肉感的な赤毛美人で、獵師ほどではないけど、背が高く、なんとも肉弾戦な夫婦である。

獵師がイノシシを解体している間、奥さんがこの世界のことをいろいろと教えてくれた。

まず、「内陸からの脱出組」とやらが、見つかるとアレな理由なんだけど。

今いるここは、ハノーク帝国領の第2自由都市エリシエの街の近郊にあたる場所らしい。自由都市は帝国の都市でも特別なもので、エリシエのほかに2箇所だけ定められ、その都市でだけ他国との貿易が許されているんだそうだ。それ故、他の帝国都市と比べて活気があり、また物資も豊富なため、制限を掛けないといくらでも他の帝国都市から人が押し寄せてきてしまう。それで、例の本国帰還か

奴隷化かって話になるわけで、実際マジで俺もヤバいところだったわけだ。獵師さまさまだ。

獵師は名前をシェロー・ロートといい、この辺りで獵をしながら、モンスターが森から出てくるのを監視したり退治したりする仕事をしているそうだ。

獵師になる前は傭兵として、それなりにブイブイ言わせてたそう
で、奥さんことレベツカさんも同じ傭兵団出身となればまさに異世
界クオリティ。奥さん身長180cmくらいあるんだよ……。獵師
にいたっては190近いし……。

モンスターは基本的にはこの辺りにはいないんだそうだ。ただそ
れでも自然発生的に”湧いてしまう”ことがあるらしく、その場合、
人のいる場所へ真っ直ぐ向かってくるため、村と森との直線状にあ
るこの場所で監視するのが最も適している。……という説明だっ
たんだけど、なんともわかりづらい。湧いてしまうって？

「モンスターってのは、血肉を持った生物じゃあないからねー。森
みたいに魔素が溜まりやすい場所では、ときどき湧くんだよ。それ
で、一直線に強い魔力を持つ人間を襲いにやってくる。それを私た
ちがやつつけてるってわけさ。ま、このへんでは大した奴は湧かな
いし、心配はいらないよ」

「あ、いえ、心配、というわけではないんですけどね。しかし、そ
れではモンスターは通常はどんな場所に『湧く』んですか？」

「普通はダンジョンに湧くわね。あとは竜が住んでいるような場所
も魔素が濃くてモンスターが湧きやすいかな。ま、ダンジョンは出
入り口に結界を施してるから、中からモンスターが出てくることは
ないし、竜がいるような場所も人里から離れた場所だからね。一般

人がモンスターを目にする機会は少なくなるわ」

ダンジョンk t k r。

なんとも正統派なRPGワールドである。モンスターの定義は予想の斜め上だったけど、それほど出ないみたいだし、そこらで襲われることはなさそうだ。

——と、思っていたら、魔獣やら亜人族やらの『野生動物』が、人里から離れたところにはいるので十分危険だそうで……。特に亜人族は人間を痛めつけて連れ帰ってアレしちゃうようなナニなんじゃないやー貞操の危機の多い異世界で参っちゃいますね！

イノシシ解体中のシェローさんが戻ってきて、手伝いのためにレベッカさんを連れて行った（皮を剥ぐ為に一旦イノシシを吊る必要があるそうだ）為、部屋を検分して生活様式をこっそりチェックすることにした。文明は進んでないみたいだけど、どいう道具使ってるのか凄く興味あるしな。

基本的には、木製の道具が多いが、壁に飾られている飾り皿は磁器のようだし、カトラリーも銀製のようだ。まあ、普段使い皿は磁器ではなく陶器と木の器のようだし、磁器は高級品ということだろう。そのわりにカトラリーはすべて銀（だと思っ）だ。ステンレス鋼がないんだろうな、おそろく。

キッチンのかまど式で当然ガスなんかはなし。燃料は木炭で、今は火を落としている。

壁にシェローさんの武器と思しき使い込まれた大剣が立てかけられていた。

さすがに勝手に触るのはルール違反のような気がしたので触らなかったが、その横の壁に、装飾の施された短剣が飾られているのを見つけて、目が釘付けになってしまった。

鞘に入っているのが刀身は見えないが、絶妙な捻れ奎の入った黒檀の鞘に幾何学文様の螺鈿細工が入り、鞘の石突と口金、鰐、柄頭は青白く輝く金属製で美しい彫金が施されている。柄はらせん状に削られた鞘と同材料の黒檀で、こちらも奎の入りが美しい。

一見しただけでわかる、素晴らしい品だ。黒を主体とした落ち着いた一品であるのに、魔力とでも言うようなオーラが立ち昇り、その存在を主張している。

これはどうあっても刀身も見たい。

シェローさんとレベッカさんはまだイノシシと格闘中のようなだったので、ちよつとだけちよつとだけよ……と呟きながらコッソリ短剣を手にとって、鞘を引き抜いた。

鈍く輝く刀身はダマスカス製らしい多層鋼の文様入りの両刃で、

鎬の部分にはルーン文字のようなもの（とにかく読めない文字のよ
うな記号）が打ち込んである。

……うん。文句なしにカッコいい。

——ヤバイ、ハッキリ言ってめっちゃ欲しい。

こんなに物欲が刺激されるアイテムは久しぶりだわあ。これくら
いのブツだとオクに出さずに殿堂入りにするんだけどな！。

つか、こんなのが普通にあるってことは、上手くやればこういう
のこつちで手に入れられるってことなんじゃね？ これは短剣だけ
ロングソード
と長剣でもこれくらい素晴らしいやつもあるんじゃない？

ヤバイ、異世界深入りするつもりなかったけど、こんなお宝が手
に入るならもうちょつと無理してもいいかもしれないか思いはじ
めちゃった！ 思いはじめちゃった！

ハッキリ言っただけなら重要文化財クラスなんじゃね？ う
おー！ どうしよどうしよ！

うおオン！

「……それが気に入ったの？」

「つつ！」

突然声を掛けられて飛び上がる。つい熱中しすぎてしまい、レベ
ッ力さんが戻ってきたのにぜんぜん気がつかなかった。

「……えっと、はい、すみません、勝手に触ってしまって……。こ
んなにカッコいい剣は見たことがなかったの」

「ふふふ、記憶喪失なのに、そっちはわかるの？」

「……（あちゃー）」

やっべ、失敗した！ と思っていたと、あまり気にした様子もなくレベルカさんが続ける。

「それね、傭兵やってたところに団長が皇帝から賜った品でね。団長が亡くなったときに形見として貰ってきたもののよ。実際に使うようなものじゃないから飾ってるんだけどね。なかなかステキでしょう？」

「はい、……記憶が戻ったとかではないんですが、この剣にはなんだか引き寄せられてしまつて……。こういうものを扱うような仕事でもしていたのかもしれない」

「仕事？ —— そうですねジローくん天職は？」

「……テンシヨク？ ですか？」

「祝福は受けているんでしょう？ その天職よ」

「……かれこれ2年くらいニートなんですけお……。それに祝福ってなんだから。そもそもなんで職業聞いてくるの？ 誤魔化しきれないニート臭が……？」

「……すみません、ちょっと天職？ のことは記憶を喪失しているようで……。あと祝福ってのもよくわからなくて……」

「天職は、祝福を受けているなら、念じれば見られるわよー。こう
『天職、天職、天職……』とね」

なんというフワツとした説明……。さっぱり意味がわからねえ。
そもそも、祝福なんてものは受けてないんだから、見られるわけ
がないんだし、念じたフリして「無理でした。祝福とやらは受けて
いない模様です」 と誤魔化した。

「うーん？ ジローくんは商人見習いだったりしたのかしらねー。
狙った天職を得るための修行するのはたまーにあることだし……。
ま、とにかく明日、祝福を受けに行ってみましょうか、試しに。こ
れからエリシエで暮らすなら結局なんらかの天職が必要になるしね
ー」

「祝福つてのがイマイチよくわからないんですけど、こういうもの
なんですか？」

「”祝福を受けて天職を得る”。大精霊ル・バラカが祝福を授けて
くださるのよ。そして、天職に目覚めるというわけ」

祝福を受けて天職を得る……。か。わかるようなわからないような
話だ。しかし明日ってことは、今日どうすんの俺。家になんにも言
つてきてないんですけど……。

「とにかく今日は泊まっ てきなさいな」

「は、はい！ ありがとうございます。お世話になりました！」

某RPGの「てめえみてえなガキは一晩泊まっ ていきやがれ」

を思い出しながらやけくそで返事をする俺だった。

第5話 異世界都市は地中海の香り

どこか深いところからゆっくりと浮かび上がるように、俺は意識を取り戻しかけていた。

……まあ、普通に朝になつて目が覚めたつてただけだけでもな。慣れない人んちのベッドだけれど、思いのほか良く眠れてしまった。なんだかんだいって疲れてたんだな。昨日はあのと、夕飯をご馳走になつてから、すぐ寝たんだけれど。

しかし昨日の夕飯はなかなかにワイルドだったなあ……。

シェローさんが「今日はご馳走だぞ、ラッキーだったな」と持つて来たのはイノシシの肝臓^{レバー}で、主食は芋、副菜は豆、さらにシェローさんが手ずから焼いたイノシシステーキ。

当然レバーは生のまま、味付けは岩塩だけで頂きました。まあ、ワイルドだけと思いの他美味しかった。新鮮で。

しかし、イノシシステーキはちよつと野趣強すぎて都会育ちのいらにゃ辛いものがあつただよ……。味は濃いけど、臭いもわりと濃い……。食べられないほどではないんだが、せめて香辛料なんかで誤魔化せれば……。と思つたけど、香辛料は高級品なんだとかで。

じゃあ香草とかでもよかったんだけど、人んちでご馳走になつていて文句も言えないしな！。けっこう要領いい末っ子の俺としては「とつても美味しいです！」とか言つて食べましたよ。かなり胃がもたれたがな！

とは言え、初の異世界での食事。味覚に大きな差があつたらどうしようかと、少し心配もあつたが、多少ワイルドさがあるとはいえ、基本的なところに差はなさそうで安心したものだ。

今度は味噌でも差し入れしてやろう。異世界人の口に合うかはわからないが。

——さて、考えてたのとちよつと違う展開に巻き込まれるようにして、一晚異世界で過ごしてしまつたわけけれども、これからどうしようか……。昨日、寝る前に多少は考えたが——

まず、一つ目として。

当初の予定としては、こっちの情報をある程度得たら「異世界へ渡航できる権利」を売ろうと思つてたけれど、この国の情勢だと正直かなり無理くさいことが判明してしまつたこと。

なんせ、内陸から来たと思われたら憲兵にタイーホだ。さすがにそんな異世界ライフを売りつけるわけにもいかんだろう。

二つ目として。

例の短剣ダガーのこと。

あれだけの品は、普通に俺が日本でネットオークション遊びをしていても絶対に手に入れることはできないと断言できる。まあ、こちらの世界でも簡単に手に入るようなものでもないだろうが（皇帝

から賜ったと言っていたしな）、だが傭兵へ褒美として渡すくらいだ、完全に入手できないほどの品でもないだろう。

滅多に見られないようなお宝だとはいえ、ちよつと驚くくらい夢中になっていて、我ながら引くわあ……（昨日もあのあと小一時間くらい見させてもらってしまった）。

三つ目として。

日本に異世界の品を持ち込んでネットオークションに掛けても儲かりそうだが、日本からこっちに物を持ち込んだら、もつとずつと儲かりそうだっていうこと。昨日の夕飯での香辛料の例を出すまでもなく、売れそうなものは数限りなくあるし。

それと昨日それとなくシェローさんに聞いたんだけど、こっちの通貨って、銅貨、銀貨、そして金貨なんだよね。金貨ですよ金貨。日本に持ち帰ればそのまま換金できる！グラム4500円ぐらいだっけ、今。

正直、フリーマーケットでお宝探るのが馬鹿らしいほどの効率を叩き出すのが明白だもんだから、かなり商売っ気が出てきてしまっているんだよね。

四つ目として。

まあ、これは三つ目からの派生なんだが、効率よく儲かるってことは、お金持ちになってアレとかコレとか買えたり、店とか始められたり、もつと言うと、会社とか立ち上げちゃって社長になれちゃったりとか！とかとか！ってことなんだよね。

でも厳密になんの仕事したいとかは全然ないんだ……。働いたら負けかなと思っている。

ああ、それか思い切って趣味全開の店のオーナーとかなら、いいかもなあ……。儲け度外視で商売できるくらい異世界との交易で儲

かつたらやれるかもしれないな。デュフツ。

五つ目として。

やっぱ異世界で彼女作ったりとか、胸が熱くなるよな……。

なんてったって異世界、こっちの価値観では二ートの俺でもモテたりとかもありえるかもしれないしな！　かと言って、向こうからアプローチ掛けてくるような憤みのない女はごめんだよ！　彼女いない暦〓年齢の童帝なめんな！

……　ちよつと脱線したかな。でもわりと切実な問題なんだよコレ。

六つ目として。

気になるよね、祝福。

単純に自分がなんの天職があるのか、すっげー気になる。だって現実にはネオ二ートなんだもん！！

受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！

「受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！」
「ん？　ジローなんか言ったか？」

うわぁああ、口に出してた。

これから「記憶喪失」の俺としては、どうしたらいいだろうかとシェローさんに相談してみた。

やりたいことはいろいろ思いついたけど、記憶喪失のはずの俺がいきなり精力的に活動しはじめちゃうのも不自然だしな。

その際、「どうやら自分は商人みたいなことをしていたらしい。していたんじゃないかな？ 多分？」

などと遠まわし且つ曖昧に言ってみたら、まず神殿で祝福を受け、そこでの天職次第で、対応したギルドに上手く紹介してくれるとのこと。

なんだからずいぶん良い人すぎて恐縮しちゃうんだけど、シェローさん曰く、困っている人に出会うということ自体が、ル・バラカのお導きであって、祝福を受けているものは、その導きに遵っているだけだとか何とか。

要するにそういう宗教観だということなんだろうけれど、シェローさんが特別いい人だけじゃないかという気もしないでもない。

パツと見、山賊みたいなオッサンんだけどなー、人は見かけじや判断できないものだね！

そんなわけで、エリシエの街に向かってシェローさんとレベツカさんと俺の3人と、昨日のイノシシの肉と皮を積んだ荷馬1頭で歩いている。村の手前で街道に出て、シェローさんの家からおよそ2時間くらいでエリシエの街に到着した。

エリシエは、2メートル程度のその気になれば簡単に登れる程度の城郭に囲まれた都市で、石作りの家以外にも煉瓦作りの家も散見

でき、赤い屋根の連なりが美しい。

入り口には門番はあれど、普通に開けっぴろげで入り放題出放題。想像してたのよりずいぶんユルかった。

確かに活気のある街だ。

異世界の街というより、イタリアかどこかの外国へ来てしまったかのような感覚に襲われる。が、街行く人をよく見ると、ローブを着た魔法使い風の男やら、猫耳に尻尾の獣人少女やら（ちよっと毛深かめ）、槍を担いだプレートメイルやら、背の低いガチムチヒゲもじゃ親父（ドワーフ？）の集団やら、とにかく種々雑多で、ああ、やはり異世界なんだなといちいち再認識させられた。数でいえば、人間が一番多いようだったけど、亜人というか異世界種族というか、人間以外の種族の方もけっこういるんだよ。

神殿に行く前に肉と毛皮を卸しに行くというので、まずはそれに同行する。シエローさんが肉と毛皮を担いで、買取所らしき建物に入っていくのを見守りなら僕といっしょに残ったレベツカさんに気になったことを質問してみた。

「あの肉と毛皮でどれくらいのお金になるんですか？」

「んー、せいぜい銀貨3枚になればいいところね。それでもうちの食費の半月分くらいにはなるから悪くない額ではあるのよ。最近はお金師が減ったから、少しだけ買取価格が上がったってのもあるしね」

……銀貨3枚で半月の食費というと、銀貨1枚＝1万円くらいの価値なんだろうか？ いや、それは日本の貨幣価値に照らし合わせすぎているか……。

「金貨は銀貨10枚分なんですって。銅貨は10枚では銀貨1枚分？」

「金貨はそれとおりにけど、銅貨はちょっと違うわね。10枚で銀貨1枚になるのは白銅貨よ。そして、青銅貨、これね、これが10枚で白銅貨1枚分」

と言って、白銅貨と青銅貨を見せてくれるレベッカさん。白銅貨は厳つくした500円玉の使い古したもののようなコインで、青銅貨は、1セント硬貨に似た小さいコインだった。

うーん、とりあえず10進法で安心した。けど、まだまいちわからない。

レベッカさんには悪いが、いろいろ質問させてもらおう。

「そういえばお金の単位をしりませんでした。銀貨1枚と白銅貨4枚と青銅貨7枚みたいな場合は、147なんとかって数えるんですよね？」

「おー、ジローくんお金の計算ができるんだね。やっぱり商人見習いでもやってたのかしら、一般的にはあんまりそういう計算使わないから」

「え、じゃあどうやってるんですか？」

「だからそのまま。銀貨1枚と白銅4枚と青銅7枚、って数えるんだよ？」

うーん？ そんな難しい計算でもなくね？ お金の単位は「エル」だと教えてもらったけど、1銀貨＝100エルとか教えれば幼稚園児でもわかることじゃね？

あんまりっていうかぜんぜん算数が発達してないのかな。大丈夫か異世界人。詐欺に簡単に引っかけちゃうぞ！

「でもレベッカさんはわかるんですね、計算」

「私は傭兵団で団員への報奨金の計算とか少しやってたからね。簡単なものしかできないけど、お金の計算は得意よー？」

なるほど、納得。

ま、俺も最終学歴高卒様であるからして、算数は苦手だからな。しかも「読み書きそろばん」のうち、読み書きが完全アウトな異世界人！^{チキユ}

そうこうしていると、銀貨3枚を握り締めたシェローさんが、買取所から戻ってきた。あとでこの金で必要な物の買出しをするそうだが、その前に神殿に連れて行ってくれるようだ。

じゃあ、神殿行ってパツと祝福うけちゃおうぜ！ とシェローさん。

ずいぶん軽いな。

第5話 異世界都市は地中海の香り（後書き）

主人公、高卒童貞無職という3冠王。けっして作者に投影しているわけではないです。けっして。

第6話 異世界神殿は妖精の香り

「サルディネーラ！」

神殿は街の中央広場正面に建っていた。そこそこ大きな建物——神殿というより教会みたいなイメージの建物——で、入り口には大精霊のシンボルらしきレリーフが飾られている（牛と蛇と鳥が合体したような謎モチーフ）。入り口から足を踏み入れると、神官と思しき女性がこちらに気付いて挨拶らしき言葉を発した。

「サルディネーラ！ 久しぶりねシェロー、レベツカ」

気さくにシェローさんとレベツカさんに話しかける神官さま。しかし、俺にはもつと重要な案件が訪れており、まずはその件について頭を整理しなければならなかった。

神官は、細身の若い女性だった。ゆつたりとした若草色のローブ。ローブの上には赤、青、白、緑の凝った意匠のカズラ。

髪は透き通るような輝くプラチナブロンドを腰まで伸ばしている。切れ長の眼、白磁のような肌、緑の瞳、……そして、特徴的な長く上がった耳……。

……みなまで言っな！

ドワーフとか獣人とかが街を歩いてた時点で、その可能性についてはいつだって考えていたんだ！

なんてったって異世界。どこからどう見てもファンタジー丸出しの世界！となれば当然の帰結じゃん。

つまりあの神官は、あの耳がちよっぴり長くて、齧ってくださいと言わんばかりに耳なんか尖らせちゃってる神官様は！

エルフだ！ まごうことなきエルフ！！

ゆゆゆ夢にまで見た、えええエルフが現実に！ 俺はついに手にいれた！ エルフの国をこの手に！ うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！

俺デイド。ツトとか大好きなんだよ！！

あwせdrftgyふじこーぽ；

——しばらくおまちください——

「ではそちらの方が祝福を受けるということでいいのね？」

「あ、はい。ジローといいます。よろしくおねがいします」

「なにモジモジしてんのよジロー。神官さまみたいなタイプが好きなのかしら？」

「ははは、こう見えても神官さまはお前の母親よりもまだ年上だぞ、おそろく。だいたい俺がガキのころ祝福を受けたときからこんな感じだからな、って痛い！」

歳のことを言われてシエローさんの耳を引っ張るエルフの神官さま。

歳のこととか全然気にしない種族かと思ひ込んでたけど、そうでもないのかな。萌えるな。

「そうね、ジローさん、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。や・さ・し・く・してあげるから」

しかしこのエルフ、ノリノリである。森の賢者だとか、孤高の種族とか、そんな感じが全然ない。

背もなんか低くくて可愛いし、俺得すぎるだろJK。

「冗談はさておき、それじゃ始めちゃいましょうか。じゃあ、ジローさん、祭壇へどうぞ」

少し高くなつた祭壇へ招かれる俺。可愛いエルフの神官ちゃん（推定年齢50歳以上）の隣に立つ俺。俺のほうがちょっとだけ背が高いね神官ちゃん。フワツとハチミツみたいな甘い匂いがしてきて、21歳童貞の俺には毒すぎるね神官ちゃん。

俺が脳内でいろんな妄想に花を咲かせているうちに、神官さまは瞳を閉じてなにやら呪文を唱え始めた。どうやら、このまま祝福の

儀式がはじまるようだ。

呪文を唱え終わると、「手を」と両手を差し出してくる。俺はその手をドギマギしながら取った。

名前と年齢と性別を聞かれたので素直に「ジロー・アヤセ、21歳、男」と答える。

一瞬、両手に熱を帯びたと思った次の瞬間、辺りをカッと光が包み、そしてすぐに止んだ。

神官はホッと一息をつくと言った。

「おめでとうございます。ル・バラカはあなたを精霊の御子と認め、祝福を授けられました。これより大精霊はいつでもあなたを見守り、あなたを助け、あなたを導いてくださります。実りある人生となりますよう」

「あ、ありがとうございます?」

……困った。こんな一瞬で祝福とやらは終わりなのか。ぶっちゃけぜんぜん変化がない。

祝福を受けてなにかが変わったという感じがしない。

やっぱり異世界人だしちょっと違うのかな?

「ジロー、それでどう? 天職はなんだったー?」

「この瞬間はいつ立ち会ってもワクワクするな!」

早く天職がなんだったかと教えろとシェローさんたち。
いやしかし、ぜんぜん変化なしなんですってば。どないせえっち
ゆうねん。

「シェローもレベルカもあせらないで。彼はまだ天職の見かたもし
らないんですから……。ジローさん。集中して。『天職、天職、天
職……』と念じてみてください。それで自分の天職を見ることが
できますから。最初は時間がかかるかもしれませんが、すぐに
慣れますからね。慣れればすぐに”出せる”ようになりますよ」

またフワつとした説明だな。レベルカさんの説明はコレの受け売
りか。

しかし、ともかくやってみるしかないか。

「天職、天職、天職……」

念じてみると、目の前にパツと半透明の石版のようなものが出現
した。物理的に板が出るとは思いもよらなかったので驚いたが、内
容も予想の斜め上だった。

板にはこうあった。

【名前】

ジロー・アヤセ

【年齢】

21歳

【性別】

男

【種族】

人間

【天職】

ソードマン

剣士

ウィザード

魔術師

ブラックスミス

鍛冶師

クラフトマン

細工師

トリックスター

詐欺師

トレイダー

商人

コック

料理人

ジェモロジスト

宝石学者

【固有職】

ザ・ライブラリー

異界の賢者

ザ・ジャーニー

異世界旅行

ザ・プリンシプル

世界の理

ザ・ジャッジメント

真実の鏡

スキル

スキル

スキル

【バラカのお導き】

・ 獵師夫婦にお礼をしよう 0 / 2

・ 真実の鏡を使ってみよう 0 / 1

天職多っ！ しかもなんか凄そうな固有職まであるんですけど……。
しかもバラカのお導きって……。これってひよっとして、いや、ひよっとしなくてもRPGでいうところの「クエスト」じゃね？
ご丁寧に進行具合まであるし。なぜだか全部日本語だし。

ワクワク顔のシェローさんとレベッカさん。神官さまも可愛い顔でどうだった？ と首をかしげている。なにこの可愛い生き物。俺がドンファンだったらここまでで20回は口説いてるよ。

「えっと、この天職つてのでいいんですかね。なんか多いけれど……、剣士、魔術師、鍛冶師、細工師、詐欺師、商人、料理人、宝石学者……」

「ちよつ、ちよつと待ってジロー、多いってどういうこと？ 今言ったのがみんな天職だって言つのー？？」

レベッカさんが困惑顔で聞いてくる。シェローさんも頭に？？？を浮かべている。神官さまが難しい顔をして俺に質問してきた。

「ジローさん、……天職は今言った8つあったんですか？」

「えっと、はい。8つです。……『天職』の括りで表示されてるの
で間違いないと思うんですが……」

「そうですか……。まず、一般的には天職は1人1つです。時々複

数の天職を持っている方もいますが、2つの天職を持っている方で30人に1人、3つなら100人に1人、4つ以上となると1000人に1人いるかどうか……。まして、8つともなるとちよつと例がありません。『夢幻の大魔導師』ですら天職は6つだったと言われているし……。あ」

突然「思い出しましたわ」と言わんばかりに瞳を輝かせるエルフ神官ちゃん。なになに、急に近づいてこないで、童貞心がビツクリしちゃうよ！

「ひよつとして……。『固有職』を得たんじゃないですか？」

さて……。どうするか。

第6話 異世界神殿は妖精の香り（後書き）

主人公がエルフ好きなのは、けっして作者の嗜好を投影しているわけではありません。けっして

第7話 異世界天職はチートの香り

「こゆうしょく？　ですか？　そういうのはアリマセンネ」

誤魔化すことにした。

可愛いエルフちゃんに嘘を付きたくはなかったが、「異界の賢者です！」とか不審すぎるだろう。異界でもストレートすぎるしな。

そうですか……と、なぜかちょっと残念そうなエルフをギュツと抱きしめてお持ち帰りしたいのをグツと我慢して、逆に質問した。

「固有職って、天職とは別にそういうのがあるんでしょうか？」

我ながらわざとらしい質問だが、訝しがることもなく答えてくれたことによると、4つ以上の天職を得た人の中には、天職の他に「固有職」というその人だけの職を得た人がいたらしい。エルフちゃん知ってるのは、『ザ・ヴェノム悪意の沼』『ザ・ミラージュ夢幻の魔導師』『ザ・シルエット影』の3つで、中でも夢幻の魔導師ってのは、100年以上前にエリシエで祝福を受けた有名人なのだそうです。

悪意の沼だの影だのという、なんとなくヒールの気配がする連中は、昔話に出てくるような大昔の人で、伝説だけが残っているんだとか何とか。

「固有職を得ると、1つだけその人だけが使える特別なスキルを得られるようになるらしいんです。『夢幻の大魔導師』はそのスキル

を使って、たった一人で千の軍勢を止めたと聞いたことがあります。スキルの名前は伝わっていないのでわからないのですけれども……」

「1つどころか、3つあるんですけど……。スキル……。」

「やっぱり内緒にしておいてよかったな。千の軍勢を止める力はなさそうだけど、変な注目を集めるのは間違いなさそうだし、いや、エルフちゃんの注目を浴びるのはやぶさかでもないんだけれどね、一般人の熱視線はいらないや。商品仕入れに行く時以外は引きこもってたから、視線とかちよつと苦手なんですよ。」

「固有職の件は「なるほどすごいものなんですネー」とわざわざしるかわし、気になっていた件を聞いてみることにする。」

「ところでですね、祝福を受けても、特になにが変わったという感じもないんですが、天職を得るとどういった違いがあるんですか？ 僕、全然体感できないから不安で……。」

「それは天職に対応した職業に実際に就くか、修行するかしなければ、なかなか体感はできませんよ。天職は要するに『その職の才能がある』ということですから」

「才能ですか。あ、普通はもっと若く祝福を受けるって言ってましたね。つまり天職があっても、それを若いうちから磨かないと大したアドバンテージにはならないって意味だったんですね……。」

「普通は10歳で祝福を受けますから……。そういう部分は確かにあります。けれど、悲観的になる必要はありません。天職持ちはおよそ5倍は速く物事を吸収して成長ができますからね。まだこれから良い経験をいくらかでも積みめますし、成長したいという気持ちがあるのなら、苦難もまた楽しく感じられるはずですよ」

「う……、5倍ですか。それはすごいですね……」

なるほど。

5倍の効率があるなら、そりゃあ天職以外の職は仕事にしないよなあ。でも逆に言うと、天職が出た職にしか就けないということなんじゃないか？ 俺の天職に詐欺師ってあったけど、詐欺師オンリーの天職の人って相当微妙じゃね？ 地元じゃ「あいつ詐欺師だぜ」と囁かれ下手すりゃ村八分だ。なにをしても信じてもらえず、誰も自分のことを知らない町から町へ詐欺を働きながら世界を旅する根無し草。この詐欺師の才能が憎い！ どうしてこんなに簡単に騙せちゃうんだよおおおお！ とか言いながら日々を過ごすのか。人事ながら可哀想になってきたわ。天職システム酷すぎるだろ。

「5倍って言っても、伸び代は人それぞれだよジロー。効率の良いい修行してなきゃ、天職なしでも努力してる子にはかなわなかったりするものよ？ 傭兵団の中には戦闘系の天職持ちじゃない人もいたけど、けっこう努力や経験でカバーしてたしねー。まあそれでも努力してて経験も積んでる天職持ちにはなかなかかなわないんだけどさ……」

まあ、確かにそうかもしれない。毎日1時間修行する天職持ちと毎日5時間修行する天職なしが同列であるなら、絶対に覆せない差ではなさそうではあるな。毎日1時間の勉強すらできずに高卒ニートになった俺だからわかる。

——しかし天職8つか。どの天職もまあ、いちおう心当たりがあるというか、長いニート暦のなかで齧ったことがあるようなものがほとんどだったりするのがアレだけど、そんな簡単なことでいいん

だろうか。

あ、魔術師だけは心当たりないな。

いや……待てよ、ひよつとしてあれか？ 20歳過ぎて童貞だから魔術師の才能があるとか出たんのか？ え？ マジで？ そういう基準で魔術師になっちゃうわけ？ 10歳で祝福受けて魔術師の才能あつたら絶望するんじゃない？ ヤラハタ（ヤラずにハタチの略）確定じゃね？

さっき魔術師の天職もあるって言っちゃったけど、あれって「自分童貞です」（キリッ）て宣言したもの同然だったんじゃない？ 天職システム酷すぎるだろ。

うわああああ

エルフ神官ちゃんに「僕のことは内緒にしてください。天職が8つあるとかで注目を浴びたくないんです」とお願いして、神殿を後にした。本当はお布施をするものらしいんだけど、今のところは一文無しだからと免除してもらった。ま、稼いだらエルフちゃんが惚れるくらいお布施しちゃうわい。

「さあ、ジロー。次はギルドに行くんだが……、どこのギルドにするんだ？ それだけ天職があるところでも選べるが」

とシェローさんに神殿を出たところで聞かれる。

「商人の関係のやつでお願いします。……えっと、そのギルドではなにをするんでしたっけ？ すみません無知で」

「よそから来た人間はギルドで登録して住人登録をするんだよ。そうすれば、この街で商売をしたり就職したりできる。本当は他の都市から来た人間は紹介状がなければ登録できないがな、まあ、そこは上手く紹介してやるよ」

「なにからなにまで本当にありがとうございます。本当に助かります」

俺がお礼をすると、突然『天職板』（俺命名）が目の前に現れる。天職板は淡く光っており、良く見ると「バラカのお導き」の「猟師にお礼をしよう0/2」が点滅しており、「猟師にお礼の品を贈ろう1/2」にヌルツと変化した。猟師にお礼をしたことによりクエストが進行したらしい。次はお礼の品を贈ればコンプリートか。

「じゃあ、商工会議所に行くとするか。中では俺がジローを紹介するからな。適当に合わせてくれ」

「は、はい。よろしくおねがいします」

商工会議所は思いのほか大きな建物だった。レンガ作りのちよつと洒落た建物で2階建て、無骨な石作りの建物が多いエリシエの街の中ではなかなか存在感がある。

入ってすぐの受付でシェローさんが「トビーはいるかい？」と受付嬢に声を掛けると、奥のほうからシェローさんより少し年下くらいか、30歳前半くらいのメガネの男を呼んで戻ってきた。

「仕事場ではトバイアスと呼んでくれよ、シェロー。こっちに顔を出すなんて珍しいじゃないか。しかもレベッカさんも同伴で……。レベッカさんもお久しぶりです」

「久しぶりねー、トビー君。今日はちょっとお願いがあつてきたのよ」

「お願い？　また魔結晶の買取りですか？　それならこつちも得にはなれど、損はしないからいくらでも受けさせてもらいますよ」

「ああ、違う違う、今日は全く別件なんだが……。おい、ジロー」

シェローさんに呼ばれてトビーと呼ばれた男の前に出る。シェローさんともレベッカさんとも親しげに話をしているから、旧知の仲なのだろうか。メガネの奥の目は鋭く、一筋縄ではいかない気配を漂わせていて隙がない。

「このジローはレベッカの姉の子、つまり甥なんだがね、エリシエ

で商人をやる為に帝都から出てきたんだが、途中で強盗に襲われて幹旋状を奪われてしまつてな、いや参つた参つた」

「……つまり幹旋状なしで登録してほしいってわけかい？ シェロ
ー？」

うわあ、なんかこの嘘わざとらしくね？ しかもレベッカさんの甥設定で無理あるだろ。似てないを通り越して人種が違うレベルなのに……。せめて俺にも一言言つておいて欲しい……。

シェローさんが頷くと、胡散臭そうに俺をジロジロ見てくるトビー氏。どう見ても嘘が見破られてます。本当にありがとうございました。

シェローさんに任せるのは無理くさいと判断。脳筋キャラに交渉を任せた結果がこれだよ！ 俺がなんとか補足して、トビー氏を納得してもらうしかねえ。

「……トバイアスさん。実は僕は記憶を失っておりますて、このシエローさんやレベッカさんの甥……らしいのですが、その記憶がないんです。幹旋状という物も持つておりませんから、状況証拠から考えると強盗に襲われた際に頭を強く殴られたかして記憶を喪失したと考えるのが妥当なのですが……」

「つまり、君がレベッカさんの甥だというのは、シェローとレベッカさんの証言しかないというわけだね？」

「……証拠はなにもありませんから。」

俺がそういうと、トビー氏は瞳を閉じて少しだけ思案し、言った。

「……レベツカさん、彼は確かにあなたの甥で間違いありませんか？」

「そうよー？ ジローは間違いなく私の甥だわ。目元なんかジェシカ姉さんにソックリ」

あっけらかんとした調子で肯定するレベツカさん。

「……………そうですか……。確かに着ている服は帝都の物だな……。君、ジロー君と言ったかな。商人に關係する天職はなにか持っているのかい？」

「あ、はい。トレーダー ジェモロジスト商人と宝石学者です」

と、とりあえず二つだけ言っておくことにする。またツラツラ8つも言っても逆に不審だしな……。

商人と宝石学者を選んだのは、まあ、単純に仕事になりやすそうな天職だなと思ったからに過ぎない。細工師や鍛冶師でも良かったけど、そうすると商売ってより職人仕事になっちゃうしな。

「ほう、ダブルジョブでしかも宝石学者とはね……」

ジツと僕の間を見つめるトビー氏。ジツと見つめ返す俺。

緊迫した雰囲気が続いていたが、フウと息を吐きシェローさんを見て観念したように肩をすくめてトビー氏は言った。

「……………ま、そういう事情なら仕方がないなシェロー。ここはお前の顔を立てて俺の権限でその子を登録してやるよ。……………今度なんか奢れよ？」

どうやら、なんとか上手くいったらしい。

記憶喪失というところを明かさないと、善良なシェローさん夫妻を騙している不審者にしか見えないからな……。

トビー氏はシェローさんの嘘には気付いていただろうが、シェローさんとレベツカさんが俺を保護しようとしているという意図を汲み取ってくれたというわけだ。良い人でよかった。

登録方法は青白い金属板に血を垂らして、それを職員が奥に持っていき、暫くして戻ってきた職員の手には二つに割られた先ほどの金属板があり、「これがギルドカードとなります」と言われ片方を渡され、あとは羊皮紙に名前と天職を記入し、それだけで終わってしまった。

ギルドカードはいわばエリシエでの住民票に近いものらしく、これがあれば店も立ち上げられるし、就職もできるし、家を買ったりもできるんだそうだ。俺始まったな。

さあて！ 祝福も受けた。ギルド登録もした。

しかし、そろそろ一回家に帰らないとなあ。昨日は無断外泊だったしな……。

第8話 異世界店舗は興奮の香り

「お2人のおかげで祝福も受けれましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。……お礼といつてもこんなものしか持っていないんですが、よかったらこれを使ってください」

と言って、店で売らなかったボウイナイフをシェローさんに渡す。これをシェローさんが受け取れば、「猟師にお礼の品を贈ろう / 2」の「お導き」^{クエスト}のクリアとなるはずだ……。

商工会議所を出てから、3人でお昼を食べに行くことになった。無一文の俺としては、これ以上の借りを作るのもあれだったので断ろうとしたのだが、「若いもんが遠慮してんじゃないよ」とレベツカさんに押し切られてしまい、異世界外食初体験と相成ったのだった。

シェローさん御用達の店は、商工会議所から10分ほど歩いた場所にあった。

パツと見の印象は屋台村。石畳の上に置かれたテーブルやら長イスに、客が思い思いに陣取って飲食している。

料理は道沿いの店舗で買うか、注文してから運ばれてくる方式のようだ。道幅せいぜい5mあるかどうかというところにテーブルやらイスやら置かれ雑多な客達が飲食しているせいで、かなり窮屈な印象がある。

なんだこれ、今日は祭りか？

レベツカさんが食べ物注文に行くのについていくことにした。半分は食事の値段のリサーチの為。半分は興味本位で。

レベツカさんが慣れた調子で注文していく。

ギョーム（鶏みたいな肉）の串焼き5本で20エル。パエリア（のような米料理。具沢山で美味そう。なんか赤い）大盛り2杯で40エル。豆のスープ3杯で15エル、ナンみtainなパン3枚で15エル。リリアラム（赤い果物）3個で10エル。

しめて、100エルなり。

つまり銀貨1枚だ。あれ？ 銀貨3枚で半月分の食費とか言ってなかったか。買いすぎなのか、それともここが高いのか？ シェローさんちの家計が心配です……。

つか、1食で半月分の食費の3分の1使っちゃってるんですけど……。

テーブルではシェローさんがセルフサービスらしい茶を用意してくれていた。飲んでみると香ばしくて美味いが飲んだことのない味の茶だった。茶葉を見たら猫ジャラシに似ていたので、とりあえず猫ジャラシ茶と命名しておこう。

鏡の屋敷がガチ西洋風だったから、西洋的な文化の世界のイメージがどうしても拭えないんだけど、実際はどうも猥雑だ。

茶碗で茶を飲むし、普通に米があるしな。……まあ、こういうほうが好みだからいいんだけども。

そうこうしているうちに料理が運ばれてきて、みんなでいただいた。

——どれもこれも予想以上に美味しい！

ギョームの串焼きは硬めの鶏肉という感じだろうか、ウイキョウに似た香草と塩で味付けされていて、風味がいい。

パエリアは赤い見た目に反してマイルドな味わいで、やわらかく煮えた香味野菜とかたまり肉も味が染みている。米は日本米よりタイ米に近いようだ。

スープには豆のほかに卵も入っていて健康に良さそうだ。

ナンのようなパンは、ナンというよりは、ピザの耳の部分という感じだった。うっすらと油が垂らしており、オヤツ代わりにこれだけで食べても良さそうなくらいだ。

やばい、異世界やばい。食い物超美味い。

銀貨1枚だから高いかとも思ったけどこの味なら納得だわ。それに量も半端ねえ。

パエリアの大盛りって米5合分くらいあるんだもの。それが2つ、つまり1升分くらいあるんだぜ。まったくシエローさんもレベツカさんも大変な健啖家だよ。

3人でガッツ食いして完食。

最後にデザートとしてリリアムというフルーツをいただいた。

見た目はマンゴーに似ているが、マンゴーより酸味の強い少し硬めフルーツで、この辺では食後に良く食べるものなのだそうだ。サイズも大きめ（リンゴより一回り大きいくらい）のこれが1個4エル、3個でまけてもらって10エルだった。

しかし、1エルの価値が日本円に換算してどれくらいなのかいまいち掴めない。日本だったらあのパエリアなんて1杯3000円くらいすると思うけど（なにせ量が量だ）、それで試算すると1エル＝150円だ。

最小単位が150円ってありえないだろう……。いや……。ありえるのか？ 異世界に地球の常識を持ってきても詮無きことなのかな？？

まあ、とりあえずこの件は保留としよう。日本のものを売却すればその額で判断できるだろうしな。

「シロー。いくとこないんだろうし、しばらくはうちに居候していてもいいわよ。ベッドもあるし……。街からはちょっと遠いけれどね」

食後の茶を飲んだときにレベッカさんが唐突に切り出した。シエローさんもウムウムと頷いている。

提案としては非常に嬉しい。見ず知らずの、記憶喪失で、内陸の服を着てて、天職が8つもある、正体不明の小僧に対しての待遇としては、なんといいか良すぎる。良い人すぎて不安になるレベルだよ。

でも、さすがにそんなに甘えるわけにもいかないし、なんと言っ
ても一回家に帰らないといかん。親になんにも言っていないし、ネッ
トオークションに出品中のものもそのままだし。

折角の厚意に心苦しい限りではあるが……。

「僕みたいなものにそうまで言ってもらえるのは、非常に嬉しいんですが、さすがにそこまで甘えるのは心苦しいので、なんとか自分でがんばってみようかと思っています。この手持ちの品を売れば少しはお金になると思いますので……」

そう言って自衛の為と思って数本持ち込んでいた自作のナイフを
テーブルに広げた。

——ナイフ作りとの出会いは中学1年生のころだった。

中学の時の部活の顧問が技術教師で（数学も教えていたが）、その彼が副業でカスタムナイフビルダーをやっていて、放課後にナイフを作っているのを見ていたらいつの間にかハマってしまい、今でも半年に1本くらいのペースで作り続けている。

まあ、その技術教師と今だに付き合いがあるから材料を安く譲ってもらったり、工具を貸してもらったりして、ニートになっても続けられているんだけどな。鋼材はともかく電動工具なんかは自分じやなかなか買えないし。

シェローさんが興味深そうに大振りな一本を手に取り、品定めす

るように見始める。

武器になりそうなもの……、と思って、手持ちで一番刃渡りの長いボウイナイフを持ち込んだ物だ。

全長で35cm、刃渡り20cmの分厚いナイフで、個人でこのサイズを作る人はあまりいないかもしれない。日本で持ち歩いたら発見次第即御用だが、自分で愛でる用に作ったから問題はない。

鋼材はATS-34。ナイフ用ステンレスの定番だ。

革のさやシースも自作。牛革製で細かいカーヴィングも施してある自慢の一品だ。

「良いナイフだな。仕事柄刃物はいろいろと見てきたが、こんな顔が映るほど磨かれた刀身は初めてだ。作りも丁寧だし、かなり高価い品なんじゃないか？」

と、ある意味刃物のプロとでもいうべきシェローさんにも好評なようだ。

「かなり高価」がどれくらいの金額を指すかはわからないが、無名の素人の自作品なので、たとえネットオークションに出しても1万円にもなれば良いほうだろう。まあ、ネットでなんか売る気もないけど。

「記憶がないもので、どういう謂れの品かはわからないのですが、僕も良い品だと感じます。何本か売って、しばらくの活動資金になれば……、と思うのですが」

「そうだな。これならばかなりの金額になるだろう。知り合いの道具屋のところで頼んでみよう」

「あ、ありがとうございます！」

こつちの世界に持って来ていたのは、例のボウイナイフの他には、小ぶりのドロップポイントのシースナイフを2本、中サイズのハンターナイフが1本である。ボウイナイフは特別手が掛かっている品なので売るつもりはないが、シースナイフとハンターナイフは売ってしまうつもりだ。

全部で金貨1枚にでもなればしめたものだが……。

シェローさんの知り合いの道具屋は、予想に反して大店だった。

どうしてもRPGの印象で物事を考えるからか、例の大作RPGの道具屋的なものを連想してしまっていていかん。「いらつしやいませ。ここは道具屋だ。なににするかね。ここで装備するかね。120Gだがいいかね」みたいな、オッサン1人でやってる5坪くらいでやってるちっちゃな店をね。

道具屋は「ミーカー商会」と言い、このへんでは一番大きい店なのだろう。中に入ってみると、道具屋というよりは武器防具の店といった感じだった。

店内は5坪どころか30坪くらいはありそう。売っている品物は……、RPGだコレ。

「ここは武器防具の店だ。なににするかね。ここで装備するかね」
っていうアレだコレ。

剣、ナイフ、槍にメイスにワンドに斧に鎧に盾に籠手にスネ当て
外套も服も靴も売っているし、旅に使うであろう道具、寝袋やロー
プや鍋とか食器とか、照明に使う松明やらランタンやらもある。

……楽しい!!

俺こういう店好きなんだよ!

ここでなら半日は時間つぶせるわあ。

夢中になつて武器や防具なんかを見ていると、シェローさんが呆
れたように呼びに来た。

……すみません、つい夢中になっちゃって……。ほんとういう
のに目がないんですよ……。

シェローさんが店主に涉りを付けてくれ、ナイフは買い取ってく
れるから、とにかく見せてみてくれとのこと。

ボウイナイフ以外のナイフを取り出して、カウンターに並べる。

店主は40がらみの筋骨隆々のハゲ親父だ。強そうな見た目に反
して、目つきは優しいだ。

「……このへんでは見ない品だな……。とすると内陸産か、あるい
は山岳のほうの作か……? いったいどうなつとるんだコレは」

などとブツブツ言いながら検品を行っている。

すみません、それ地球産なんですよ。厳密には俺作なんです。――

――とも言えないので、黙って検品するのを見守った。

どうやら事前にシエローさんが俺が記憶喪失だと言ってくれてあったようで、必要以上の詮索をされることもなく査定が終了した。

「待たせたな。――結論から言つと、こいつを売ってくれるなら全部で金貨10枚出そう」

「えっ!？」

軽く絶句してしまった。10枚!？

金貨10枚つて日本円に換算して……、さっきの暫定的な試算の1エル＝150円で計算するとあんた、金貨10枚はつまり10000エル……。

……150万円やで。

「――ああ、勘違いするなよ。ナイフとしての価値で言つたら金貨1枚くらいのものだぞ。……ただな、このナイフの製法は今のところまだこの国には伝わっていない、俺でも始めて見るものだ。さらに鋼材もわからん。比重から考えると鉄のようなんだが……。ハンドル材も見ることがないものだ。要するに、なにからなにまで謎だつてことだ」

そりゃあそうだろうな。鋼材は日本製のステンレスだし、ハンド

ル材はマルカイト（米製の人口合成素材）なんだから。

「……つまり謎を買い取ってくれるというわけですか？」

「謎、というよりは信用だな。記憶喪失ということだが……、例えばだな、お前がこいつを『帝都』か『山岳』あたりからサンプルとして持って来る途中で記憶を失ったものとする。それで、無一文だからとうちに持ちこまれたとして、新しい技術の粋を凝らして作られたものと解っているのに買い叩くわけにはいかんだろう。店の信用と、なによりプライドの問題としてな。だから金貨10枚だ。ま、そのかわり、このナイフの製法については研究させてもらうがね」

なるほどな。確かに俺が商人でよその国から新しい品を売るためのサンプルを持って来た使者とするなら、記憶喪失なのをいいことにカモノネギよろしく買い叩くってわけにもいかないんだな。

しかし、サンプルとか言うってことは、俺が商人に見えるってことなのかな？

「商人でなけりや、あれだけ熱心に店の商品をチェックしたりはしないさ。記憶を失ってもそういうところは変わらないものなんだな！」

と、ワハハと笑う店主。

なるほどねー。ただの物好きアイテム好きなだけなんだけどな。商人の天職はあるけれど。

ま、高く買い取ってくれるのだから、素直に甘えさせてもらうことにしよう。これで当面の活動資金には困らなそうだから、素直に嬉しい。

しかも金貨だったら、ひよっとして向こうに戻ったら換金できる

かもだし……な！

「じゃあ商談成立だな。ちょっと待っててくれ」

そう言つて金貨を10枚取り出し、青い巾着袋に入れてくれる。
それを受け取りズッシリとした重みを感じながら、シエローさんとレベッカさんに向き直つて言つた。

「シエローさん、レベッカさん、本当に何から何までありがとうございます。お2人のおかげで祝福も受けられましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。お礼といつてもこんなものしか持っていないんですが、よかつたらこれを使つてください」

そしてバッグからボウイナイフを取り出しシエローさんに渡した。

第9話 異世界クエストは現実の香り

「いいのか？ いや、嬉しいが、これはお前の記憶を取り戻す鍵になる品なのかもしれないんだぞ？」

「あ、はい」

あ、はい。じゃねええええ。

記憶喪失設定なのに持ち物簡単に手放しちゃオカシイってことに、全く考えが回らなかった……。

でもまあ……、実際には記憶喪失ではないのだし、いいか！

もう、そういう人ってことで理解してもらおう！

「そうですね。今のところはそれを持っていてもなにも感じるところありませんし、構いません。記憶のことは少しずつ取り戻せば良いかと思っていますしね」

シェローさんは一応それで納得したのか、それとも意外とナイフが欲しかったのか、それ以上の追求はせずナイフを受け取ってくれた。た。

受け取ってくれたことによつて「これでクエストクリアとなるのかなー」と考えていると。

突然輝きだす俺とシェローさん。

そして浮かび上がる俺の天職板。

そして……。

ポンッ。

と小気味良い音を立てて、天職板が手のひらサイズの可愛い妖精さんになった。マジか。おちつけ。

「よおお、はじめましてだな。アホみたいなツラしやがって。ハイこれオメデトウの品物。大事にしなくてもいいけど”ハジメテの精霊石”は記念に取っておく奴が多いらしいぜ。じゃあな。これからも世のため精霊様のためにガンバツてくれよ」

ポンッ。

……………え？

なにいまの？ 白昼夢とかの類かな？

手のひらに青い石みたいのが乗ってるから夢じゃないのかな？

助けを求めるようにシエローさんのほうを見ると。シエローさんの手にも俺のと同じような石が乗っていた。…………どゆこと？

「シエローさん、今のは？」

と聞くと、俺の手に石があるのを認め、肩を抱くように言った。

「おお、ジローもお導きを達成したんだな、おめでとう！ 俺のほうも今達成となったよ！」

「えっと？ つまりどういうことですか？」

興奮しているシェローさんを横目にレベッカさんが詳しく説明してくれた。

お導きを達成すると、天職板が精霊の形を宿し、その精霊が達成の記念として「精霊石」という石をくれるのだそう。この精霊石は大精霊の加護そのものと考えられていて、見た目がまるつきり宝石ということも抜きにしても、非常に高額で取引されるものなのだそう。

なので人々はお導きがあれば、みな積極的にそのお導きを「達成しよう」とがんばるものなのだそう。

シェローさんの手にも精霊石があったのは、彼もまたお導きを達成したからで、そのお導きってのはつまるところ……、俺との出会いのところから発生したクエスト……ってことだよなあ。確かにお導きに導かれているだけとか何とか言ってたけれどもなあ……。

「……そうだったんですかあ……。ふふふ」

俺を助けてくれたのが彼の無償の善意だったわけではないことに微妙な落胆を覚えているらしい自分のピュアさになんだか笑えてきてしまっていた。

そんな事気にするようなタイプじゃないと思ってただけだな、

自分のこと。

それに……、実際結果オーライなのだし、俺なんて記憶喪失という嘘をついているんだしな。固有職のことだって隠しているし。だからなんか言えたような義理でもないんだけどな。

やっぱなんだかんだ言っても慣れない異世界で心が弱ってたのかな。

急にどうでもよくなってきたな。……もうとにかくすぐに日本に帰りたくなったなあ。

そう思ってしまったら、もうどうにも駄目で。

「……それでは、本当にありがとうございました。また、落ち着いたら伺わせていただきますね。それではっ」

そう言って身を翻し、2人から逃げるように店を出た。

いや、実際に店を出てから全速力で走って逃げた。

後ろでレベッカさんが「ちょ、ちょっと待ちなさい」とか言っているのが聞こえていたけれど、呼び止められるほどに、もう止まれなくなってしまった。

自分でもよくわからない気持ちに支配されていた。

走って走って走って走って、一気に街道に出て、そこからも休まず走って鏡の屋敷に辿り着いた。

そうして1日ぶりに自分の部屋への帰還を果たしたのだった。

部屋に帰ってきて、母親に無断外泊の件を適当に弁明して、コーヒーを飲んだらもう普通に落ち着いてしまった。

我ながらいったいなんなのかと思う。心が弱すぎるから、あんなことで逃げ出したりするんだと理解はできるけれど、だからといってなにをするつもりもありはしなかった。

今は金貨と精霊石とギルドカードを机に並べている。

シェローさんとレベッカさんから、事実上逃げてきてしまった件については、とりあえず自分の中で保留とすることにした。バイトばつくれ経験多数の俺にすれば余裕でした。

……もう少し落ち着いて、自分のなかであの感情を噛み砕くことができたならまた挨拶に行くことにしよう。

いよいよ、これからの異世界での商売について考える。

今、手元にある資金は、異世界の金は金貨が10枚。あと一応換金できるらしい精霊石がひとつ。日本円はコツコツ貯めた虎の子の87万円。

この資金でうまいこと商売をはじめたいわけだが……。

しかし、実際に商売を始めるとなると、まずは誰かしらか事情の知る協力者がいないと辛いものがあるんだよな。いちいち記憶喪失だからとか言い訳しながら情報収集するのに疲れたつてもあるし、なにかあったときのためにボディガードも欲しい。

剣士の天職があるから向こうで修行するって手もあるけど、生兵法は大怪我の元ともいうしな。やめておいたほうがいいだろう。剣は欲しいが。

身を守るにはやっぱ傭兵でも雇うのがいいのかな？ でも傭兵つてのもなあ……。なんか裏切られて後からバツサリ！ みたいなイメージがあるしなあ。

傭兵なんかより、神官ちゃんとかがアルバイトでやってくれないかなあ。「こここれこれも仕事のうちだよ。だよ」とか、いろいろ楽しそうだけどなあ。

——そうだ。エルフだ。

商売もいいけど、エルフのこと調べないといかん。神官ちゃんしかまだエルフ見てないから、どれくらいの割合で街にエルフ住んでるのかわからないけど、エルフ見つけてお友達にならないといかん。なんなら金貨の1、2枚もちらつかせてでも……。

ハッ！ いかんいかん。

まあとにかく一度神官ちゃんのところに行つて、エルフ情報を聞いたり、記念写真撮ったりしてこよう。そんでプロマイド作ってこつちで売ろう。隠し撮り写真集とかでもいいかもしれんな。1万部くらい売れるんじゃないかな。

ハッ！ いかんいかん。

あと活動拠点をどうするかも考えないとかん。とりあらずは鏡の屋敷でいいのかもしれないけど、屋敷の権利とかどうなってんだ。異世界のそういうのってよくわからんぜ……。いずれトビー氏にでも聞いてみよう。

それで俺、エルフと新婚生活するんだ……。

とにかく、最初は異世界での足場固めをすることにしよう。お金稼ぎ自体は向こうのほうで容易ではあろうし、軍資金も多い。

こっちでの活動は後回しだな。

……いや待てよ。

こっちの世界ではまず種まきからやっておくか……。

俺はPCを立ち上げると、いきつけの巨大匿名掲示板群にスレ建てするのだった。

【速報】俺んちの鏡が異世界と繋がった

1 : 名も無き妖精

今朝起きると部屋にある鏡が異世界へ繋がってたんだけど
なんかアドバースある？

第10話 異世界金貨はプチブルの香り

2 : 名も無き妖精
鏡叩き割って寝ろ

3 : しまった！ここは糞スレだ！

< o √

くく

オレが止めているうちに他スレへ逃げろ！
早く！早く！オレに構わず逃げろ！

4 : 名も無き妖精
異世界のお姫様の着替えシーンが覗けるんですよ

5 : 名も無き妖精
いいからはやく写真うつしろよ

6 : 名も無き妖精
この手のスレ何度目だ
雑談スレでやれ

〜糞スレ終了〜

7 : 孤独の俺 4 n o i g 3 2 9 d e

どんなふう繋がつてるのか詳しく説明してくれよ
見えてるだけなのか向こうにいけるのか

全身鏡なのか手鏡なのかでぜんぜん違っただろ

8 : 名も無き妖精

ネタにマジレスカコイ

9 : 名も無き妖精

どんな風に繋がってるのか・・・

1本のスジに決まってるだろう

10 : 名も無き妖精

通報しました

11 : 名も無き妖精

1まだあ？

12 : 1

鏡から異世界行ってきました

鏡の向こうは中世の屋敷(廃屋)だったよ

そこにいた異世界生物の写真撮ったからうpしとくよ

今からもっと冒険してくる！

他にもなんか面白いもん見つけたら写真撮ってくるわ

<画像アドレス>

13 : 名も無き妖精

向こうに行けるって設定か

1が向こうに行ってる間に鏡割っておいてやるよ

14 : 名も無き妖精

グロ貼るなボケエ

15 : 名も無き妖精

怖くて開けないんですが、どんな画像？

16 : 名も無き妖精

でかいゲジゲジ

17 : 名も無き妖精

ゲwwwwジwwwwゲwwwwジwwww

どう見てもクモだろこれwwwwww

18 : 名も無き妖精

なにこれ？

19 : 名も無き妖精

あし多くね？

あし多くね？

20 : 名も無き妖精

ガチじゃんコレ

21 : 名も無き妖精

1はプロCGクリエイター

22 : 名も無き妖精

<<21

よかった……脚の多い巨クモはいなかったんや……

23 : 孤独の俺 4noigg329de

やけに展開早いな！

気をつけて行って来いよ！

24 : 名も無き妖精

さっそくこのクモ擬人化しようぜ！

25 : 名も無き妖精

異世界の蜘蛛だから

異^{いく}蜘蛛たんですね

26 : 名も無き妖精

イクツ！イクツ！イツちゃう！

27 : 名も無き妖精

いい加減にしろよ

そこはアナザーワールドのスパイダーだから
アナルちゃんだろう

28 : 名も無き妖精

なぜそうなるwww

こんな調子でレスが続いていく。

よかった、アホばかりで。

とりあいずスレのほうは適当にレスしながら運用するとして、写真が足りないから次はちゃんと撮影もしなきゃな。

とりあいず、今日は異世界には行かないことにして、こっちの世界のことを整理することにした。

オクで出しているものは一度すべて引き上げておく。幸い入札入ってる商品がなかったから助かった。

親にはちよつとデカイ仕入れ先を開拓したからしばらく留守がちになると言っておく。あと、部屋には絶対入らないように釘を刺すことも忘れない。まあ、母親にそんな釘を刺してもまさに又力釘なんだけどな。入ってくるときはどんどん入ってきちゃうだろうし。普段は鏡には布でもかけて隠蔽しとこう。

次は金貨について調べた。

まず金貨の重さが1つ40グラム。本物の金、つまりこの世界の金と同じ金属元素で且つ純金製なのだとすれば、今の大体の相場の1グラム40000円で換算したとして、なんと16万円にもなる。10枚で160万円だ。まあ、これはあくまでも超楽観的な試算だけれどもな。

もしもこの金貨を売るとして、そもそもこんな正体不明な品がオクで売れるのかという心配があった為、ネットオークションで「金貨」を検索。

……あ、ダメだコレ。

出品されているものは、当然といえば当然か、正規品（信用ある機関で発行された保証書付きの金貨のことね）ばかり。

中には胡散臭いものも出品されてはいるんだけど……。と、いろいろ見ていると添付画像に興味深いものを見つけた。

ゴールドテスター。

金の持つ運動エネルギーを電気化学的に演算してうんたらかんとかで、金の含有率を調べられる便利な機械なのだそう。こんな便利なものがあるとは、と検索をかけてみたら驚きの24万円。高けえ……。

しかし、これがあれば24カラット（純金）まで計測ができる。この金貨が何カラットかはわからないが、仮にこれで計測して24カラットなら、相当に美味い。とりあえず、機械を持ってそうな金買取センターにでも持ってってみよう。

次は精霊石。

無加工の宝石のような青い石だ。つーかラピスラズリの原石なんじゃねーのかなコレ。ブラック企業にいたころ数回扱ったことあるわ。

精霊石っていうからには、特別になにか効果があるのかどうかわからないけれど、ただのラピスラズリの原石だとしたら価値としては大したことない。サイズも小さいし。

そういえば、シェローさんの手にあつた石は青くなかった。もし、お導きをクリアーするたびに宝石の原石がもらえて、もらえる石がランダムだった場合、「当たり」の石に当たったらすごいぞ。石のサイズはだいたい拳大だけど、もしダイヤモンドでこのサイズの石だったら「億」もあるで……。

そんなでかいダイヤを売れるツテがあればの話だけどなー。

とはいえ精霊石は宝石なのか、それとも魔法の石なのか、ちょっと情報が足りないのでこれも一旦保留として、まずは金貨の価値を調べるために金貨1枚を握り締めて家を出た。

家の軽自動車に乗って隣町の金買取センターに向かう。隣町にしたのは、売ろうとしている商品があまりに出所不明で怪しいからだ。まあ、とりあいずはまだ売る気はないんだけどな。一応の用心つてやつだよ。

金買取センターは、質屋然としており、表からは中の様子がわからない。こういう店のほうが出所不明な貴金属とか売りやすそうではあるな。駐車場に車を止めて、サツと入る。

窓口の店員に、金の買取を頼みたいと金貨を見せる。

たんたんと検品してから件のゴールドテスターを取り出す店員。固唾を飲んで見守る俺。頼む！ 頼むぞー！ 24金来い！！

「お待たせしました。こちら24カラットのゴールド40・3グラムですね。本日の金の買取金額がグラム3821円ですから、査定額は多少色を付けされていたいて、コチラになります」

154000の数字を出した電卓を提示する店員。

キターーーー！ 24カラット！ 実はせいぜい18カラットくらいかな？ と思つてたのに純金！ 純金ですぞー！！

……ついつい熱くなつてしまつたが、さてどうする。売る気は正直なかつたが、思ひのほか良い金額が出ちゃつたぜ。このまま売つてしまつても構わないが……。

……ま、いいか！

売っちゃおう！ そんで無駄使いしよう！

事務的に免許証の提示が求められた以外、なんの詮索もなく買い取りは終わった。今俺の手には154000円がある。ネットオクで1ヶ月がんばつても純利益でこの額が出るのは稀だ。

それが一日でなー……。

もうホントに異世界との交易で生活するしかねえ……。

その日はその後、ラーメン屋でトッピング全部乗せ大盛り味噌ラーメンを食べて（なんと餃子も付けた）、スーパー銭湯でひとつ風呂浴びて、缶ビールを買つて帰つて晩酌して寝た。

いやあ、本当に贅沢って良いものですね！

え？ セコイ？

2年も二トしてるとこんなでも大贅沢なんだよ！

第11話 異世界生活への始動の香り

次の日、朝5時に起きた俺は、昨日のうちに洗って乾かしておいた異世界服を身にまとい、向こうに持っていくものをバッグに詰め込んだ。

まずは、ナイフ。ボウイナイフはシェローさんにあげてしまったので、あとは中型か小型のナイフしか手元がない。昔、冗談で作ったククリナイフもあるが、あれはまだ未完成のまま放置してあるし……。

なので、中型のなんの変哲もないシースナイフを1本だけ持つことにした。

次に金貨を1枚だけこつちに残して、残りの8枚をバッグにIN。あとは、精霊石にギルドカード、デジカメ、救急キットにチリ紙、ハンカチ、タオル、お泊りセット（歯ブラシとか下着の替え）、非常食に、手持ちの宝石の中から数点。

まあ、こんなもんか。

お泊りセットを用意したのはアレだ。宿泊代がどれくらいになるけど、向こうの宿に泊まってみるつもりだからだ。

手持ちの宝石は、安いものからイミテーション（模造品）、ちょっと高いものまで、全部で20数点。ジュエリーケースに入れて持っていく。

この宝石は例のブラック企業で働いていたところに手に入れたものだ。ああ、そういえば俺がどんな職種の仕事をしていたかまだ話していないかったな。

ハローワークの楽しげな求人募集に釣られて入ったその会社は、一口で言えば宝飾貿易業とでもいうもので、やってることはけっこう幅広く、宝石や絵画、毛皮やらの輸入輸出。絵画や宝石の営業販売、各種イベントの企画運営なんかが主な業務だった。

俺はそんな中、宝石の販売員として割り当てられたのだが、ノルマは月200万円、残業代なし、休日出勤手当てなし、朝礼長い、飲み会の強要、怒号に叱咤、さらに社長の顔がクドい、などなどブラック丸出しなその体質にすぐに辟易してしまった。

ボーナスが現物支給でしかも、宝石か毛皮か美術品が好きなものから選んでいいぞ！ などと言われた時は、マジで辞めると誓ったもんだっけ……。やっぱボーナス年4回とかいう会社にホイホイ入っちゃダメってことだったんだな……。

まあ、でもあんな会社にも入ってたから宝石学者なんて天職があるんだろうとは思っけ……。もう、2度とあんなところでは働きたくないものだ……。俺が辞めてから暫くして脱税で摘発されたって噂だけど、どうなったのかなあ……。

それはさておき、異世界だ。さっさと出かけちゃおう！

そしてやってきました異世界。

とりあらずこれからエリシエの街に向かうわけだが、距離がけっこうしんどいだよな。移動手段つーと、馬くらいしか思い浮かばないけど、馬なんて乗ったことないしなあ。自転車ってわけにもい

かないだろうし……。

剣士だの詐欺師だのなんて天職いらないから、騎手の天職でもあれば良かったのに。むしろこれから増えないかしら天職。神官ちゃんにそういうこともあるか聞いてみるかな。

なんてことをウダウダ考えつつも、シェローさんと出くわさないように気を配り歩き、エリシエに到着した。

鏡の屋敷から歩いたり小走りしたりして、およそ1時間半。歩く速度がだいたい時速6kmだとして9kmくらいか？ 実際はもう少し短いだろうが、なんにせよ5km以上か。なんらかの移動手段を確保したいものだな。

エリシエの街は、昨日と同じように活気に満ちていた。

俺は一直線に神殿に向かった。目指すは神官ちゃん！ エルフの神官ちゃんですぞ！（そういえば名前聞いてなかったな）

「今日は神官様はお休みだよ」

デジカメ握りしめて勢い勇んで神殿に飛び込んだ俺に無慈悲な言葉を投げ捨てるカボツチャさん（仮名 推定58歳人間女。髪型がカボチャぽい）。

「では、神官さまをお願いします」

「だから今日は神官様はアレの日だからお休みなんだよ。また明日来るんだね」

ガーンだな。出鼻をくじかれた。

……………つか、今アレの日って言った？ あのオバサン、アレの日って言ったよね。アレの日ってつまりアレの日ってことなのかな。エルフでも月に1回あるのかな。いや、まてよ……………、エルフはあんまり性的欲求が強い種族と聞くから……………、その反動で半年とか1年に1回、その……………強烈な発情的なものが来るって昔なんかのノベルで読んだ！ それだ！ このフラグ逃せない！

「……………どうしても火急の用事でしてね……………。取り次ぐことはできませんかね？」

「そう言われてもねえ。アレの日のエルフ族がどこに行ってるかなんて、よほど近い人間じゃないと知らないと思うよ。当然ここにはいないし」

よし！ 探そう！ 年に1度の発情期で苦しんでいる神官ちゃんを助けられるのは俺しかない！ フラグ回収するしかない！！

……しかし、考えてみるまでもなく探す手立てはなかった。なんの取っ掛かりもないのに、ほぼ完全に他人のエルフちゃんを探すつてのは無理がある。さてどうすつかと思ったが、ふと、例のスキルのどれかが使えるのではないかと思い当たった。

ダメ元でやってみるか！

天職板を出す。

異界の賢者のところにあるスキル「異世界旅行」「世界の理」そして「真実の鏡」。

真実の鏡は使えば即クエストクリアになるから、これはどちらにせよ早めに使おうと思っていたが。

さーで、ところでこのスキルってどうやって使うの？ 試しに板を指でクリックしてみたが抵抗なくすり抜けちゃうばかり。

やっぱり天職板出すのと同じようにやるのかな。

とりあえず、異世界旅行を試してみる。試すといってもなんだか全然意味が解らん。「異世界旅行異世界旅行異世界旅行……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

さ、次々。「世界の理世界の理世界の理……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

大丈夫かこれ。なんか前提からして間違ってるのかな。説明書が欲しいにゃー。

気をとりなおして、次。「真実の鏡真実の鏡真実の鏡……」とダメ元で念じてみた。

念じてすぐに、天職板の内容が一瞬で切り替わった。ページをめくるように。

切り替わった天職板にはこう刻まれていた。

【種別】

？

【名称】

？

【解説】

？

【魔術特性】

なし

【精霊加護】

なし

【所有者】

ジロー・アヤセ

「なんぞこれ……」

などとボンヤリングしてる暇もなく輝きだす俺。
ああそつだ、真実の鏡使ったからクエストクリアなんだな。

ポント

とまた、天職板が可愛い手乗りサイズの妖精になる。

「よおお！　なんだよその謎の機械はよ。鑑定するのはいいけどもうちょっとワタシ好みの奴にしてくれよな。あ、コレお祝いの品な。今回は簡単だったからシヨボーやつだぜ。売ってもいいぞ。じやあな。また世のため精霊様のためにガンバツてくれよ」

ポンッ

そしてまた手に石が乗っている。相変わらず言うことだけバツと言って帰るやつだなあ。

順を追って考えると。

まず真実の鏡は、どうやら鑑定スキルのような。妖精がそういつていたし、そもそも妖精が鑑定をしてくれているようだし。

今回鑑定したのは、俺が手に持っていたデジカメだろう。あの妖精が鑑定しているみたいだから、異世界のハイテク機器のデジカメは鑑定しきらなかつたんだろうな。

しかし、これは妖精の性能によるが、ものすごく有用なスキルだ。異世界の商品を扱うともなれば無二のものだと言ってもいい。これからどんどん使っていこう。グフフ。

精霊石はコブシ大の透明でシャープな両剣結晶体だった。

「水晶クォーツだなこれは。ハズレか。せめて色付きならよかったがなあ…

…」

「ちょ、ちよつとあなた！ それお導き？ 今達成したの？」

突然興奮して食いついてくるカボッチャさん（仮名）。まあ、確

かに外から見ればなんかボンヤリしてるな、と思ったらクエストクリアしてた、みたいな状態だろうからな。

「あ、はいそうですけど、なにか？」

「なにがもらえたんだい？」

「えっと、コレですね」

そう言っつて、水晶を見せる。

「ほー。いいのに当たったね。これ、真実の鏡だよ」

「真実の鏡ですか？」

「占いで使うからね。そう呼ばれてるんだよ、この石は」

……なるほどね、精霊さんもエスプリが利いてらあ。

水晶はタオルに包んでバッグにしまい、神殿を出た。

結局のところ神官ちゃんを探す方法はなさそうなので、神官探しはスルツと諦めた。

人間諦めが肝心だよな。気持ちの切り替えの速さで仕事に差が出るってばっちゃんも言ってた。

さて、神官ちゃんがないとなると、あと事情を知っててアテになりそうなのは商工会議所のトビー氏か武器屋のオヤジだが……。

トビー氏には俺レベツカさんの甥ってことにしてあるんだよなあ。嘘だと思破られてそうではあるんだが……。

でも、ま、トビー氏にはそれ以外にも聞きたいこともあるし、商工会議所に行ってみよう。

商工会議所に辿り着いて今更ながら気付いたが、もうギルドカード持ってるんだし、無理にトビー氏に取り次いでもらわなくても一般職員（できれば女性希望）でも全く問題ないんだよな。

よかった、あんな眼光鋭い男とマンツールとか無駄に寿命縮めるわ。

というわけで受付でギルドカードを出して、これから商売を始めるにあたっての相談に乗ってもらいたい云々を伝える。

そういうことでしたら、と受付嬢（セミロングの気の良いオカチメンコといったところか。推定年齢26歳）がそのまま相談に乗ってくれるそうだ。商談席のようなところに案内され、そこで話することになった。

「……というわけで、この街に来る途中で襲われましてね、ちょっと記憶が飛んでる部分があって、いろいろ曖昧になってるんですよ。なので、基本的なところも聞くかもしれませんがよろしくお願いします」

「まあ……、大変でしたのね。私にわかることでしたらなんでも答えさせていただきますわ」

「まず、この街か郊外で家を持ちたい場合はどこに問い合わせれば良いのでしょうか？ この街で商売をやるのは良いのですが、やはり拠点がないと、いつまでも宿暮らしというわけにはいきませんか
でね」

「家ですか。街でならば、ギルド所有のものもありますし、個人所有のもので店子くたなこゝを募集しているものもございます。郊外では土地所有権が曖昧な土地が多いですから、建てた者勝ちなところがあるというのが実情ですわ。それと郊外でも、村に住むのはあまりお奨めできません。村のルールに縛られてしまいますし、はっきりと言いますと商人にとっては足枷になりますから」

「なるほど……。たとえば、村からは離れている、誰も住んでいない屋敷なんかの場合はどうなりますか？」

「それは廃屋ということでしょうか？ 場所によりますが、廃屋となつて長そうならば、そこに住んでしまつても構わないと思いますよ。修繕にはそれなりかかるとは思います……。すでに目星を付けた屋敷が？」

「ええ、まあ。……えっと、では僕がそこに住むと決めた場合、そこが僕の家だということを保証する書類のようなものをギルドで発行してくれたりなんかはしてもらえないでしょうか。廃屋とはいえ勝手にすむという不安ですし、なにより高いお金を掛けて修繕してから、ここは俺の家だから帰せということになつても困りますし」

と言うと、さすがにそれだとわからないからと、上司のところに聞きに言ってしまった。ハッキリ言っておの屋敷が一番の懸案なのだ。あの家をまず自分の家にしてしまわないと、枕を高くして眠れない感じがある。

でも書類つてのはあまりに現代的な考え方だったかな？ ファンタジー世界なんだからテキトーでもよかったのかもな。

受付嬢が向かった方向を見ると……、わぁお、上司はトビー氏だわ。そんでトビー氏連れてきちゃったよ。俺だと確認して微妙にかめつ面だよトビー氏。

挨拶もそこそこに席について、おもむろに地図を広げるトビー氏。

「話はだいたい聞いたよジロー君。で、その屋敷とやらはどこにあるんだい？」

地図はエリシエ近郊の地図らしく、南の海に面したエリシエの街と、北と西に続く街道なんかが描かれている。

「えっと、この地図だとシェローさんの家は……、ここですか？ とすると村がここで、街道がこうだとすると……、このへんですね」

「うむ……そんなところに廃屋敷などあったかな……？ ミサキちゃん、ちよっとオルセルを呼んで来てくれ。やつはヤーツト村出身だ」

はいと返事をして席を外す受付嬢。どうやらミサキさんと言うらしい。ずいぶん日本的な名前だな。

オルセルさん（推定年齢32歳のオジサンオニイサン。人良さげ）はすぐに来た。

「オルセル。ここに何年も放置された屋敷があつてな、この青年がそこに住みたいそうなんだが、こんな場所に屋敷などあつたか？」

トビー氏が聞くと、しげしげと地図を眺めるオルセル氏。

「ここですか？ 冗談よしてくださいや。そんな場所にやなんにもありやしませんよ。ガキのころよくそこらで遊んだモンですがね。廃屋なんかあつたら格好のガキの遊び場になってますよ。それに村からも目と鼻の先じゃあないですか。よほど最近建てた屋敷ならば、俺が知らないってこともあるかもしれませんがね」

「……だ、そうだ。ジロー君。そもそもこの辺は森が近いからな。郊外に住む者はシェローのような物好きを除いては、ほとんどいない。」

「だとすると僕が見たあの屋敷は？」

「なにかを見間違えたかしたんじゃないのか？ まあ、もしもそこに本当に屋敷があつた場合は……そうだな……、住んでしまつても構わないよ。証明書を発行してもいい。どうせ君にしか見えない屋敷なんだからね」

と言つて笑顔になるトビー氏。

これ絶対馬鹿にしてるよね。ミサキさんもオルセル氏も苦い表情してるし。

クソッ、どうしてこうなった。

でもまあ、冷静に考えれば、証明書も発行してもらえるし、あの

屋敷の存在もいまいち誰にも知られていないようだ。

結果だけを見れば最高じゃん。気にしたら負けかなと思っている。

「ありがとうございます、トバイアスさん。では、その証明書はいただいておりますよ。今度ぜひ遊びにきてください」

「ああ、そうさせてもらうよ。証明書はすぐにできる。ちょっと待っていてくれるかい？」

お互いにニヤリとし合う俺とトビー氏。茶番だわあ。

トビー氏とオルセル氏が持ち場に戻っていき、また受付嬢と2人になる。

とりあいず家の件は、これでよしとして、まだ聞かなきゃならないことが沢山あるのだった。

店の持ち方。店のだいたいの値段。お奨めの宿。宿の値段。買取所のこと、この街のこと、それにこの世界のこと……。

でも、それはさておいて。

「護衛を雇いたいと思っているのですが、どこで雇えますかね？」

「護衛ですか？ ハンターギルドなどで冒険者を護衛として雇うこともできますが割高ですわよ？」

「やはりそうですよねえ。普通、商人の方はどうしてるんでしょうか。冒険者を雇うのが一般的なんですか？」

「普通は奴隷が多いんじゃないでしょうか。商隊を組むような場

合は護衛を雇う場合も多いですけど」

「奴隷……ですか。しかしイザというときに奴隷が命を掛けて働きますかね？」

「奴隷の契約は、正式な精霊契約ですから大丈夫ですわよ」

「精霊契約？」

「精霊との間に交わした契約ですわ。これを反故すれば、即ち精霊の祝福を失うことを意味しますから。まして、護衛奴隷は他国で戦士をしていた者が多いのですよ。彼らは敵に背を向けて逃げ出しただけじゃありませんわ」

なるほど。案外良いもののようにぞ奴隷。

買って試してみてもいいかもしれないぞ奴隷。

そう思ったらだんだんその気になってきたぞ奴隷。

でも一生面倒見るとか無理くさくね奴隷。

だいたい値段どれくらいするんだ奴隷。

出来れば女の子がいいな奴隷。

もつと言つと若い子じゃなきゃな奴隷。

「奴隷っていくらくらいするんすか？」

あ、喋りが雑になってしまった。すか？　じゃないよ、すか？　じゃ。

「私はあまり詳しくありませんが、ピンキリだと聞いております。安くとも金貨10枚程度はするはずですが……」

「なるほど……」

安っす。

どんな人だったとしても金貨10枚で、多く見積もって150万円じゃん。

人生安っす。

さてはて、詳しく知るためには実際に奴隷を売ってるところに行ってリサーチするしかないだろう。

奴隷商とか俺の人生はじまって最大の冒険になるで……。

第11話 異世界生活への始動の香り（後書き）

全国1000万の奴隷ファンの方おまたせしました。ようやく次回奴隷のターンのようです。

第12話 エルフ奴隷は金額的に無理な香り

俺がああ屋敷（鏡の屋敷ね）の正式な住人であるという証明書は、かなりガチな感じにトビー氏が作成してくれ、ニヤニヤしながら渡してきた。

羊皮紙に異世界言語でなんらか書いてある書類である。当然読めないのだが、まああの男のことだ仕様に問題があったりはしないだろう。

ちゃんと慇懃な感じに「お手数かけましてありがとうございます」と言っておいた。「いえいえこれもギルドの仕事ですから」と笑顔でトビー氏も応対していたし、何の問題もないぜ。

……いずれガチで屋敷に招待してやろう。どんな顔するのか見物だな。

その後聞きたかったことを一通りミサキさんに聞いてから、俺は商工会議所を後にした。次の目的地は、奴隷商館である。

もちろん奴隷を買うほどの金はないんだが、奴隷商行って、どんなもんだかりサーチしなければならんだ。……が、実際には腰が引けるなあ。こういう風に売ってるものかもわからないし、現代日本人にとって奴隷とか……、なんつーか真っ直ぐ向き合える気がしないっつーか……。

でもこっちで活動するなら、護衛、できれば、こっちの世界のこ

とを教えてくれるアドバイザーにもなってくれる人が必要なんだよな。文字も読めないし……。

奴隷商館の場所はミサキさんから聞いていたので迷わず辿り着いたんだが……が……。これは入りにくいわあ……。

商館は白壁の窓のない2階建てのきれいな建物で、入り口は閉ざされ、看板らしきものはあるものの中の様子は伺えないという、ひっじょーに入りにくいものだった。

非常に入りにくいっていうか……。これに1人で入るの？ ニートの俺が？ どう見ても会員制つつーか、一見さんお断りって感じのオーラが剥き出されちゃってるんですけど……。

でもなあ……。

異世界で商売するなら、乗り越えなければならぬハードルなんだよねこれ。貿易とは戦争なのだよ！

でもしかし、素直に扉を開けて入っていく勇氣はどうしても出なかったので、誰かが出てきたらお見送りに店のもんが出てくるだろうから、それを捕まえる作戦を採ることにした。

店の前を不審者よろしくうろつく俺。

入ろう！ と決めた勇氣が時間をおくことに萎えていくのを感じながら、しかしそのときが来たら飛び出して、ああ言うてこう言うて……とシミュレーションしていた。

15分もうろついたらころだろうか、はたしてついに店の扉が開いた。

扉から出てきたのは、30代後半くらいかの銀髪が印象的な貴族風の男だった。店員の見送りもなく普通に店から出て歩いてくる。丁度俺がいる方向に。

ひよつとするとこの人が店員かもしれない。

そして俺は思い切って話しかけてみることにした。いずれにせよ、奴隷のことが少しでも聞ければいいのだし、あの店に入るよりはハイドルが低かるう。

「あの……、ちょっとお時間よろしいでしょうか？」

「はい？　どうかなさいましたか？」

にこやかに返事をしてくれる貴族風の男。お供もなしで単独で歩いているし、貴族風の一般人なのかな。でも顔付きというか、オーラというか、正直一般人ぽくないけどもな。

「いえ、今そちらの商館から出てくるのが見えたものですから、ちよつと教えていただけたらな、と思ひまして……。あ、僕はジロー・

アヤセという者で、商人をやっております」

「商館に御用で？　今は営業中のはずですから行ってみては？」

「いや、実は、恥ずかしい話なのですが、僕は奴隷を買ったことがなくてですね、あの門構えに怯んでしましまして……。ですから、よかったら少しで良いので奴隷について教えていただけたらな……と」

「そういうことでしたか」

一応納得したらしい貴族風の男。どうやら店員ではなかったようだ。勢いに近い形でこの人に声を掛けちゃったが、やっぱ素直に店に行つとけばよかったかなあ。でもまあ今更だな。

「それでどういったことが聞きたいのです？」

「護衛のための者が欲しいのですが、相場としてはどれくらいなのかなと。種族や性別でどの程度変わるのかなんかも教えていただけたら……」

「相場という話ですが、まず、奴隷に相場というものはありません。種族、年齢、性別、容姿に経歴、天職によって大きく変わりますから。あなたがどのラインの人員を求めているかによりますが、奴隷として最低の部類『人間の60歳の男性、醜男の元山賊の下っ端で天職なし』という条件ならば金貨1枚でも買えますよ」

淀みねえなこの人。詳しいし。スラスラ教えてくれるし。この人に聞いたのは正解だったようだな。もっといろいろ聞いておこう、

そうしよう。

——そして調子に乗ってしまった。

「希望を言つなら、エルフの若い女性で剣と魔法が使える子が欲しいんです」

「……正気か貴様」

あつれー？

貴族風の男氏によると、エルフの女性というのは奴隷の中でも最上位に君臨するものらしく、買えるのは王侯貴族か大商人くらいのものらしい。

しかも予約制。

まず、奴隷になるエルフが少ない。

普通は、莫大な「借金」をしたか「犯罪」を犯したか「敗戦国」から連れてこられたのどれかで奴隷に身をやつすらしいのだが、借金で奴隷になったり、犯罪で奴隷になったりするエルフはほぼいな

い為、自ずと敗戦国奴隷のみとなるそうだ。

しかし今は戦争は膠着状態。当然新規の敗戦国奴隷は入ってこない。だからエルフの奴隷は余計に少ないという寸法。

次に、エルフは他の種族と比べても寿命が長い。

いや、大事なところは見た目の若い期間が長いところなのだ。性的な意味で。貴族なんて自分の息子に引き継いだりするらしいんだよ。性的な意味で。もうやだこの国。

次に、エルフは精霊魔法が使える。

精霊と共にあるこの国では、精霊魔法を使えるものが近くにいるってのは、特別な意味があることなのだそうだ。精霊魔法は精霊と感応して起こす奇跡なんだってさ。これは魔術師の使う魔術とは全く別の概念なんだそうで……。

最後に、エルフを奴隷にするってが、すごいステータスなんだとか。

民草にはちよつと嫌われるらしいけどね。エルフ尊敬されてるから。でも値段とか凄いいし、商人でエルフの奴隷持つてるっていうと一流の証明になるんだと。

——というわけで、俺みたいな若いペーパーが気楽に「エルフの奴隷」とか言っつていいもんじゃなかったらしい。

……だが……

「そうだったんですか……。でも買えることは買えるんですね。そ

この商館でも予約つてできるんじゃないか」

「今の話を聞いていて、それでも買う気なんですか？ 正気を疑いますよ……。それとも、大商人の息子かなにかなんですか？」

「いえ、純粹たる一個人ですけども。でも夢が金で買えるなら、目指してみたいですね」

「……………夢ですか」

難しい顔をして沈黙する貴族風の男。

そうさ、夢さ。叶うはずのなかった夢さ。地球に3億人くらいいるはずのエルフファン全体の夢さ。

それにエルフちゃんも俺のところに来たほうが幸せに決まってるね。なぜならおそらく俺が世界で一番エルフを愛しているからだ！ たとえそれが俺の独りよがりであつたとしてもだ！

沈黙していた貴族風の男が俺に向き直って言った。

「では1つ勝負をしましょうか」

「勝負ですか？」

「勝負です。あなたが勝つたらエルフをお譲りしましょう」

「ハア……、で、え？ マジで？」

いきなりよくわからない話の流れに。

つい素でマジで？ とか言ってしまう俺です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102y/>

ネットオク男の楽しい異世界貿易紀行

2011年11月24日01時50分発行